

戦姫絶唱シンフォギア EX

冬月雪乃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ーー喪うな。そして、喪わせるな。

誓いを胸に。願いを形に。奇跡を引き出せ。

思いを現実に変えろ。

目次

主人公の設定まとめ（随時更新）

1

無印・ルナアタック

クリック？ クラック！ | 5

一話 白金のギア | 8

二話 日常 | 14

三話 愉快的組織 | 23

四話 訓練 | 31

五話 櫻井了子の突発円の晩御飯

41

六話 ガングニール | 49

七話 やらかしの罰と理不尽 | 57

八話 円ちゃんおにおこ | 66

九話 十三拘束 | 72

十話 デュランダル移送大作戦☆ズド

ンもあるよ！ | 79

十一話 目覚めると | 86

十二話 襲撃 | 93

十三話 巫女と、何もかもについてけ

てない私。 | 98

十四話 月を穿つ塔砲 | 105

十五話 反転聖剣 | 112

十六話 XD | 119

第一期最終話Aパート Synchron

主人公の設定まとめ（随時更新）

かがみさき まじか
鏡崎 円

女 15歳（物語開始時点）

誕生日は十一月七日。

シンフォギア エクスカリバー

長髪。黒。

一房だけ白髪の密集地隊があり、メッシュみたいになってる。

長さは腰あたりまで。ストレート。

可愛い系の女の子で、容姿端麗。

瞳の色は赤が弱めに入った黒。白肌。

肉体的データは153／43 79／52／83

もうちよつと痩せたいと思っている。

転生者だが、転生する際に記憶と前世の自我を失っている。

生命力を燃料とする廃れた異端技術である魔術の天才とされ、装者のひとり。魔

術はデメリットが強過ぎてほぼ使わない。

普段は柔らかい丁寧語を使うが、そのまま煽りにくるため、苦手な人はとことん合わない。

装者として覚醒するときには両親を失っており、それを埋め合わせてくれるかのような二課のスタツフに依存しかけている。

押しに弱く、泣かれるとつい流される。

喪失を何より恐れているからか、座右の銘は《失うな。失わせるな》

大人びてはいるが、大人ではない。

聖詠は喪失に伸ばした手
Victory Excurbar tron

技名はアーサー王伝説出典

《逆巻く王風》
キャメロット

剣先から渦巻く旋風を巻き起こす

《最果ての塔槍》
ロンゴミニアド

フォニックゲインを増幅。天衝く塔のようにしたエクスカリバーを振り下ろす

《王剣・縛鎖一刀》
アドロンドイト

フォニックゲインを増幅。しかしエクスカリバーの中に強引に収束して威力の増加

を計った。

《叛逆の手》
クラレント

剣を投げる。

フォニックゲインのブースター付きなので相応の威力はある。

が、戻ってこない。まさに所有者に対する叛逆。

《コイル・縛鎖解放》

フォニックゲインを増幅し、エクスカリバーに収束。その後振り下ろすことでビーム

として放つ。

《エックス・選定の剣》

みんな大好き聖剣ビーム。コイルブランドと違うのは気軽に撃てるかどうかの違い

だけ。

《フェルノートの弓》

貯めたフォニックゲインを矢のように射る。

《ガラ輝の聖剣》

エクスカリバーに収束したフォニックゲインを超振動させて熱くし、放つ。とても熱

い自爆技。

絶唱

絶唱特性は『超追跡』

エクスカリバーから放たれたビームが超追跡能力を持つようになる。

二度と喪失するものかという意思の現れ。

カットインは画面上下に白と金の装飾が施され、真ん中に円のように技名（ルビ付）が配置される。

無印・ルナアタツク

クリツク？ クラツク！

上も下も、右も左も、色彩すら不覚な世界に浮いている。

手足を動かすことは愚か、眼球一つすら動かせず、どれくらいだろうか。

結構長い時間ただひたすらに漂っていた気がするし、そうでない気もする。

感情も思考も不思議と凜いでいて、波風一つ立つことはなく、ただ漠然と、『ああ、死んだのか』という自覚だけが頭を支配する。

死因までは分からないし、今となってはどうでもいい事だ。

未練はまあ、少しはあるけども。

こんな時、例えば二次創作なんかでは御都合主義の神が現れて望む力を与え、転生や転移をしてくれるのがテンプレートなのだが、きつとそんなことはあり得ない。

しかし、特に漠然と漂うだけならば適当に思考で遊ぶのもありなのではないか。

そう、例えば、向かう世界で主役級と言わずともそれに準じる位のキャラクターとしての資格を得るとか。これはやはり鉄板だろう。

望んでモブになるとか中々の強者な気がする。

ああ、魔術がある世界なら魔術を使いたいと思うのはやはり『ない世界』の人間だからか。

後は……よくあるパターンで某正義の味方の固有結界や英雄王の蔵、最強化された身体能力だろうか。容姿も端麗になるとか。

盛りに盛った能力を持って、向かう世界で主役達と絡み、時に味方に、時に敵に。縦横無尽に活躍していく。

きつと楽しい。

想像は広がり、とどまらない。

そうして光が駆け抜けるかの如く。

いつしか自我は薄れて消えていった。

????????????????
入力を確認。適切な適正值、魔術の心得、
のインストールに異常発生。鏡像と????
使用時に絶大な反動、人格の侵食、
記憶の転写開始……………Compilte.
肉体の構成開始……………Complete.
????????????????
をインストール。
????????????
にして再試行。完了。
自体のランク低下が発生します。

自我の転写開始……………ERROR.

W A N N I N G E R R O R C o d e . X X X

自我の転写時に深刻な自己認識の崩壊が発生。

再検討。失敗。

完全な自我の崩壊を確認。

対応不能。自我の転写失敗。

記憶の削除による齟齬の解消……………Complete.

補填の為、一部肉体の情報を改竄申請。

認可。改竄開始……………Complete.

Errorの除去を確認。物品としての入力を開始。

聖遺物片と科学技術の結晶であることを解析。

Error. 現状の文明技術ではないことを確認。

模倣技術として再構成……………Complete.

転生先の肉体を再構成完了。

再誕術式的全工程の完了を確認。

良き来世を。

一話 白金のギア

ー走る。駆ける。

逃げるように。急ぐ様に。

否。正しく私は逃がっている。

通う高校たるリディアン音楽院の制服を乱し、鞆につながる緋色の宝石を揺らして一心不乱に前に前に。

追う者は一見するとコミカルな、どこかでゆるキャラかなにかやっついそうな存在。

ここ最近出現率が上がった人類の天敵だ。

曰く、彼らに触れられようものなれば直ちに炭へと諸共に変わり、死を迎える。

それは如何なる場合においても絶対不変の理であり、しかも悪質なことに、出現する場所を選ばない。

かつては小学校に不意に現れ、地獄を作ったことさえある。ニュースにもなった。

時間経過で自壊する事が救いだらう。

そんな彼らに対する対応は人を盾にして自壊が始まるまで逃げるか、躲して自壊が始まるまで逃げるか、だ。

「……、あつ……」

廻る景色。

すなわち、転倒。

膝をしたたかに打つたらしくジクジクと痛む。

走り続けた弊害と、不意の痛みに体が動くことを拒否する様に言うことを聞かない。

迫る追っ手。

即ち、死。

視線先に鞆が転がり、そこに繋がる宝石が……つい先ほどまで生きていた両親が遺したお守りが目に入る。

「おか、さ……おとう……さん……」

手を伸ばし、宝石を握る。

暖かい。

同時に胸に広がる暖かな旋律。

その衝動は胸から溢れていく様に口から溢れ……

「……*Victory Excursion*……手」

瞬間。

私は全裸になった。

「なっ、えっ、ええっ!？」

羞恥と訳の分からなさに困惑を隠せない。

だが、状況も現実も決して私を待ってはくれない。

追っ手は自らを槍のように変化させ、飛来。

その死の飛来を拒否するように目を閉じればしかし、いつまでも死は私の身を襲わな
い。

恐る恐るに瞼を開けていくと、

「……炭……？」

そこに舞うのは確かに炭。

誰かが身代わりになったのかと辺りを見渡すが、誰もいない。

一体なんだという問いには直ぐに解答が来た。——これ以上なく分かりやすい形で。

追い討ちをかけるように飛来する天敵達は私を囲むように展開されているバリアの
ようなものに触れた瞬間、炭と還っていく。

「これって一体……？」

全裸で天敵——ノイズに打ち勝てるようになりました、だなんてなんて嬉しくないん
だろう。

せめて服は着させてほしい。

思わずボヤクが、女の子的に全く間違っていないと思う。

「わわっ!？」

その声に応えるように、服が来た。

バリアが狭まり、肉体が触れる。

触れたところからびったりとしたボディスーツが構成され、さらに長袖長スカートの

ワンピースドレスが。

それにかぶせるかの様に身体と手足を包むのは白金の装甲。

あつという間に白と金の戦闘用ドレスに身を包む事になり、羞恥は消えたがさらに困惑が増す。

長い黒髪は一房だけある白髪を残して後ろで纏められ、ヘッドホンの様なものが頭部に装着。

耳当て部分からはバイザーが飛び出して鼻から上を隠す。

無意識の動きで腕を鋭く垂直に振り抜けば、そこに当然のように剣の柄がある。握り、袈裟懸けに振り抜く。

現れたのは身に纏うと同じ白金の両刃剣。

「へ、変身ですか……!？」

さながら魔法少女の様に。

ならば、と胸に逸る様に広がる衝動旋律に任せて駆け出せば、口からは歌が零れだす。

「ーもう二度と なにかを取りこぼすものか」

右、左、上段下段。袈裟懸け。時折回転。

自分の身体ではないように体が動く。

「ーそのためになら私は何も厭わない」

大きく後ろに後退。

剣を突き付けるように鋭く前に。

ー《逆巻く王風》
キャメロット

暴風が突如として吹き荒れ、その暴威はノイズを炭へと還していく。

「ー小さな手の平から溢れ Missing.」

まだ多い。

こんな数に追われていたのかと思えば絶望するしかないが、しかし今はならば怖くはない。

「ー激情すら喪失そこに届かずに Lost my heat.」

荒々しい旋律と共に剣を振り上げる。

輝けるそれは剣全てを覆い尽くし、輝ける十字を作り出す。

「ーアアアアアアアッ!!」

もはや歌ですらない。

かろうじて旋律だけ保った猛りを衝動のままに叫び、一瞬で天衝く塔がごとく成長した輝きを振り下ろす。

ー 《ロンゴミニアド最果ての塔槍》

雲を割り、ノイズを炭へとしていく一撃。

光の奔流が世界を染める。

ノイズがいなくなったと本能的な確信を得、しかし油断はしないと《逆巻く王風》をブースターに使い飛び上がる。

再び使つて地面と平行に飛び、降り立ったその場で変身が解ける。

あとは重い身体を引きずつて自宅に戻れば完璧だ。

ー それをとある組織に捕捉されていることを除けば、だが。

二話 日常

二課は大混乱に陥っていた。

先の悲劇にて戦える存在——装者を一人失い、デスマーチが如くノイズと戦い続けていた矢先に唐突に現れたシンフォギアの反応——すなわち装者のもの。

反応解析自体はすぐに終わり、かつて英国にて存在したエクスカリバーであることが判明。

すぐさま二課所属装者たる風鳴翼を急行させるも、急激に膨れ上がるフォニックゲインと天を貫く様な光の柱。そして倒壊。恐らく攻撃なのだろう。

同時にノイズの反応は根絶される。

「生体反応の確認急げ！」

「はいっ！」

下手をすればあのエネルギーは絶唱級。

命を焼べて得られる絶唱は何の処置もしなければ死に至るのは自明だ。

であれば、と自他共に甘いことを自覚する二課の司令官たる風鳴弦十郎は指示を出す。

しかし、発見した反応は高速で移動。大まかな位置しか分からない。おそらくこの反応があの柱を作り出したのだろう。と当たりをつける。

次いで指示を飛ばし、特定を急がせるが、その最中に反応は消失。

しかし程なくして監視カメラなどの記録から身元は割り出せ、リディアン音楽院所属であることと自宅は住宅密集地にあり、ここで拘束連行などすれば彼女の今後にも関わり、さらには機密の漏洩などもあり得る話となることを鑑みて聴取を後日の放課後とする決定を下す。

しかし、目下の問題は彼女が所有していたコンバータユニットらしき緋色の宝石だった。

いわく、このコンバータユニットは粗悪品。模造品でしかない、とシンフォギア関係の第一人者櫻井了子が言い切ったのだ。

そして、そうであるならば機密扱いになっている櫻井理論が盗み見られていることになる。

でなければシンフォギアの模造品など作れるはずもないのだから。

連れさらわれた少女の名前を『鏡崎 円』であることを突き止めるが、両親はノイズによって死に、親族はそもそも袂を分かつていた事を判明する。

——そして、鏡崎家とはある異端技術を自分の元としていたこと、円自身がその最高

傑作であることを家から発見された手記から特定する。

#

海に沈む様な。

ゆつくりと底に向かって沈んでいく。

瞬時に様々な記憶が頭をよぎる。

知らない記憶。知ってる記憶。

——封じられた、忌まわしい記憶。

そもそも、鏡崎家とはかつてに栄え、もはや数える程しか現存しない魔術師の家系だ。

この異端技術は記憶でも歌でもなく、生命力を使うことで発現する。

魔術師の目的とは世界との同一。

それをしてどうするのかという辺りは分からないし、興味もない。

確実なのは、鏡崎 円という少女は鏡崎家の最高傑作として調整されて生まれ、しかしその扱いに苦いものを得ていた両親によって連れ出され、絶縁したということ。

両親はまず、その記憶を封じた。

これには感謝するべきだろう。なにせ、そのおかげで学生生活を満喫出来たのだから。

しかし、封印も綻びを得ていたのか。それとも両親の死をトリガーに封印を解除され

たのか。

ここに至つて忌まわしき魔術の記憶が噴出して刻まれていく。

どれもこれも、即興で行うのは無理。さらに言えば多くが土地などを使う大規模なもの。役には立たない。

一部神秘文字を刻むことで効果を発揮する文字魔術や、指を指すことで呪うガンドなどはあるが、ノイズとの戦いで役に立つかと言われると首を傾げざるを得ない。

瞬きをして、

刹那。

光に溢れて目がさめる。

#

朝日が差す。

しかし、己の心境は爽やかな心地とは正反対であった。

生を受け、十五年も育ててくれた両親の、永久的な不在。

どこか現実味のないそれを、しじまに落ちた家の気配から感じ取ってしまう。

死する寸前まで身を案じ、愛し、何かを託す様に笑つて背中を押して走れと叫んだあの姿。

未だ鮮烈な輝きをもつその光景は一生忘れはしないだろう。

しかし不思議と実感が湧かないのは私が薄情なのか、それとも遺体が残らない故のものなのか。

すこし端末で調べれば、同じ様な経験をしたノイズ被害者はわりといるようではあった。

慰みにもならないが。

「……とりあえず、学校には行きましょう」

多分身も入らない。

しかし、この家に居るよりは多分マシだ。

あの女教師の怒鳴り声——その矛先は大体決まっている——を聞けばそれなりに日常に帰った気分を得られるのではないかな、という思惑もあった。

ままならないものだ。

その場で服を脱ぎ、その時昨日そのまま寝てしまったことを思い出す。

ならばとそのまま下着姿で脱衣所に向かう。

咎める人は居ない。

その事実が堪らなく苦しくて、しかし眼から零れ落ちるまでには至らない。

それすら自責となってしまうが、黙って受け入れる他ない。他者がどうであれ、自分がそうであるのはこの一時間もしない内に理解した。

あの変身が、両親が生きて居る間に起きて居たならば。

その思いを胸に宿し、重苦しい気分ですhowerを頭から浴びる。

ー浴びたshowerは温かく、目元も感応したように熱くなつていく。

#

showerを浴び、さっぱりとしたところで髪を乾かす。

長く、艶やかな黒髪だ。一房だけ白髪の密集地があり、天然のメッシュのようになっている。手入れは大変だが、母譲りの自慢でもある。

温風で乾かし、次いで冷風で髪を冷やして開いたキューティクルを閉じる。

こうしなければ髪は傷む一方だ。

そして制服を着用。

鞆は昨日と変わらないが、ペンダントのチェーンが切れていたので適当なネックレスに通してトップにする。

形見だ。肌身離さず持つておきたいから、首にかけて制服の下に隠す。

良くも悪くも緩い校風だが、だからといって何をしてもいいわけではない。

学校に苦情や苦言が届けば対処せざる得なくなるし、そうなればこの形見は肌身離さずとはいかない。

要はTPOをわきまえましょうという話だ。

そのまま冷凍ピザを出してレンジへ。

昼用に弁当箱を出すのが、何か思い付かないし適当にブロック状の携帯食を詰めていく。

見た目がなんだかすごくデイストピア飯といった具合だが、味は保証されている。冷凍ピザの温めが終わった。

出してサクサクと食べていく。

ーピザはやはり人類が生み出した至高の財……！

無言で食べ進み、終わる。

台所で食べていても誰も咎めない。

#

「ー立花サンツ!!」

甲高い怒鳴り声に思わず自然をそちらに向ける。

明るい髪色に、明るい表情。

同級生の困ったような、苦笑いするような不思議な表情にああなんだ、と思う。

立花響。アイドルユニット『ツヴァイウィング』の片翼が失われた凄惨な事件。その

唯一の生還者。

その全貌は明らかになっていないが、特に根拠もないパッシングは日本全体に波及

し、流行病のように終息していった。

両親は立花響擁護派だったが。

ともあれ、サバイバーズキルトもかくやというほどに人助けに奔走する彼女は今日も今日とて人助けの先に自分が損を被ったようだ。

隣、いつも一緒にいる少女も呆れた顔をしている。

実は恒例の行事なので誰も気にしない……というか、実は立花響へのバッシングはリディアンにもあり、それを見て聞いて実感した自分としてはあの怒鳴りがあるからそこまで表層化しなくて済んでいるのかなとも思う。

誰だつて自分の手は汚したくない。が、こうして誰かが彼女を責め立てているのを眺めている分にはいい……とか。

卑劣な思考だ。

「はあ……」

陰鬱な思考を打ち切る。

ノートは取り終わってないし、散々だ。

やっぱ集中出来ない。

胸に当たるペンダントを握り、暖かで、しかし激しい旋律を耳に入れる。

暖かなのは父親。激しいのは母親を思い出す。

いきなり激しい音が強くなった。

びっくりして手を離す。

まるで集中しなさいと怒られた気分だ。

苦笑し、ノートに取り掛かる。

不思議と、穏やかな気分で一日を過ごせた。

三話 愉快な組織

放課後。

帰宅しようかと荷をまとめ、席を立ったタイミングで出口側から黄色い悲鳴が聞こえてきた。

きから始まる甲高いそれは不意打ちのように耳に叩きつけられ、三半規管を刺激する。

まあ関係のない話だと帰ろうとすると背後、声が届く。

「――鏡崎 円さんはいるかしら？」

凜とした女声。

一斉に視線が集まるのを感じる。

「私ですが」

こうなつては誤魔化しは効かないだろう。

誤魔化す気は無いが。

振り返る。抜き身の刀のような意思力を感じる瞳に射抜かれた。

そう彼女こそ、リディアンを大きくした立役者。

先の悲劇で片翼を失いこそすれ、それを乗り越えてさらなる高みに上り詰めたアイドルの頂点。

「……なにか、用ですか？ 風鳴翼先輩」

きつとこの学校に通う誰もが憧れ、尊敬する人物がそこにいた。

#

ツヴァイウィングの片翼、亡くなった天羽奏が緋色なら、風鳴翼は蒼だ。

前をシャンとして歩く本人を見ながら思う。

しかしその蒼は海のそれではなく、夜のそれ。

天羽奏がいた時代は昼のそれであったことを考えれば、天羽奏の夕暮れを越えて夜に至ったかのような。

「……何も聞かないのね」

「聞いて答えてくださる雰囲気には見えませんので」

冷たい夜の蒼が振り返る。

抜き身の刀かと思う視線は怖い、こちらにはガンドがある。

一日中お腹を壊す呪いだってかけられるのだと考え、努めて物怖じしていないような姿勢を演じる。

「……そう」

短く答え、彼女は一つの扉を開く。

「エレベーター……?」

地下に向かう巨大な縦穴。

よく分からない色彩の絵画が大きく描かれたそれに箱が付いている。

その箱には手すりがあること以外はエレベーターと大差ない作りだ。

「これより先は真剣な場だ。そうでないならお引き取り願おう」

硬い声で翼先輩はいう。

「……帰っていいんですか?」

「……えっ」

空気が死んだ。

「いや、だって私なんの説明もなく、しかもしてくれる雰囲気すらなくここまで来て真剣になれないなら帰れ、なんて言われたら誰でも帰りますよ」

「……うっ」

「空気読まないで説明求めなかった私も悪いかもですけど、先輩も戦場に行くような面持ちで動かれては怖くて聞けませんし」

「……あうっ」

「いやー、よかった。帰っていいなら帰ります。それでは」

「あ、いや、まつ、待つてくれないか!？」

進行してきた方角から逆に足を向けると制止された。

だからと足を止めると、なんだか泣きそうな先輩がそこにいた。

「えっ……」

「っ、付いてきてほしい……じゃないとわたしはお使いもろくに出来ない剣になってしまっ……」

「っ、剣……?？」

お使いが出来ない剣とはなんだ。

剣は動かないぞ。

ものすごく気になるが、それはそれとしてあんな泣きそうな顔をされると帰るに帰れない。

「う、わ、分かりました。説明は、してくださいよ……!？」

鏡崎円。十五歳。自分でも意外な弱点を発見したある日の放課後である。

#

破裂音が鳴り響く。

すわ銃声かと一瞬でルーンを組成。

さらにガンドを指先に共にして攻防自在の簡易要塞を組み上げる。

「つて……え……？」

一瞬の動きに自分でもドン引きしていると、頭にルーンをすり抜けて細長いものが柔らかに乗る。

「び、びつくりさせてしまったみたいね！」

「そ、そうだな了子くん！」

騒然としている中、頭に乗ったそれを摘んで眺めると、

「……パーティ用の、クラツカー……？」

「その通りだ鏡崎円くん。一瞬で歴戦の兵士もかくやというほどの動きを見せてくれたが、君の周りを浮かぶそれは噂の魔術だろうか。とりあえず害意はないから解いてくれないか？」

男性の声。

声の元を辿ると、鍛え上げられた筋肉がいた。

おお！ マツスル！

なんだこのツツコミ。

ちよつと自分が分からなくなってきた。

「やあ。ようこそ特異災害対策機動本部二課へ。俺は風鳴弦十郎。司令官なんかやつてる」

「私は櫻井了子。二課の技術局長なんかやってるわ」

「……あ、はい、ご丁寧にどうも……」

毒気を抜かれた様に呆然としていて、ルーンとガンドはゆっくりと霧散していき、消える。

それを好機と見たのか、女性が近寄り、

「あつたかいものどうぞ」

「あつあつたかいものどうも……」

すぐく自然な流れで暖かいものを貰ってしまった。

思わず鋭く風鳴先輩を見ると、目を顔ごと背けて口を必死に押さえていた。

しかし身体全体が震えているため、隠し切れていない。

「――先輩……?」

「あ、くふっ、いや、これはちが、ふふっ」

「隠し切れていません」

――説明を要求します。

口から紡いだ言葉は自分でも驚くほど冷たく鋭いものだった。

#

つまり噛み砕いた説明としてはこうだ。

自分の持っていたペンダントは不思議な変身アイテムで、開発者は櫻井了子女史。歌いながら戦うことでノイズを殴ることが出来る。

その核には聖遺物を使っており、変身する人間——装者はこれをエネルギーに変え、増幅させてバトルスーツに再構成する。

そしてそんな人間やノイズに対抗するために組織されたのが二課である、と。

「この歳で魔法少女の仲間入りとは恐れ入りますね。ところで全裸に剥かれるのは櫻井女史の趣味ですか？」

「ふえっ!? い、いやねえ、違うわよ。そのままバトルスーツを構成すると大変な事になるからそうなるだけよ?」

「作画的でないなら一度腹パンするだけで許します」

——もちろんギアを纏って。

本気に乗せた声色に櫻井女史の顔が青褪める。

しかし取り下げるともりはない。

「いきなり公共の、道路のど真ん中で全裸に剥かれた女子高生の気持ちがかかりますか?」

「えっ、いや、あの」

「いえ、分からなくてもいいです。分からなくていいのでとりあえず殴らせてください」

ペンダントを取り出すと横合いから紙皿が飛び込んできた。

「いやいやいやいや、そういうのは良くないとはおもいますが、ひとまず料理など如何ですか？ 冷めると勿体無いですし」

「緒川くん……！」

「ほほう、いえ、しかしたしかに料理に罪はありませんね」

ムグムグと口に料理を入れていく。

美味しい。

思わず笑みがこぼれると、二課の全員がほっこり顔になる。

なんだか恥ずかしくなつて顔を隠してしまった。

なんだかんだ有耶無耶にされた気しかない。

四話 訓練

あれから数日。

放課後は二課に顔を出し、シユミレーターでの仮想訓練を繰り返す。

ノイズの発生は幸いにして無く、スクランブルになることは無かった。

『次。ノイズとの乱戦時、要救護者をその中心から救い出す想定だ』

いや無理だろう。

思わず口にしかけたが、しかしどのような状態であれ助ける事を諦めるのは悪だ。

そもそも、二度と喪わない、喪わせないと二課に所属する時に決めた。

手段は問わなくていい。目的は変えてもいい。けれど、その信条だけは曲げてはならない。

「了解しました」

纏う白金は灯を照らし、反射して伶俐な鋭さを持つて存在感とする。

その存在感が以前より重く、しかし心地の良い強さを感じさせるのは櫻井女史が行ったシンフォギア改修によるものか。

形見の品とは別だ。

こちらは中のエクスカリバーを抜いてダミーを入れ、真実ただのアクセサリーとなった。

そして女史の解析によればエクスカリバー自体の特性は収束と放出。私の絶唱特性が超追跡とのこと。

収束と放出がどう私と混ざったら超追跡に変わるかは分からないが、シンフォギアの第一人者が言うのであれば間違いはないのだろう。

さて。

ノイズは目測三十から五十。

その中心に要救護者がいるのだとバイザーに表示されている。

ノイズはほぼ同時に要救護者に攻撃を仕掛けるといふ前提条件で、こちらの勝利条件はノイズの殲滅ではなく、要救護者の救出だ。

で、あるなら。

剣を握る拳に力が宿る。

胸に宿る旋律が口を経て力と変わり、エクスカリバーは力を収束してその身に溜め込んでいく。

ーMusic 『失喪エクスカリバー』

「ーもう二度と なにかを取りこぼすものか

そのためになら私は何も厭わないー」

思い返すのは目の前で失われた大切。

知らぬ事といえ、しかし、タイミングが悪く、合わず、だから取りこぼしたもの。

「小さな手の平からすべて Missing.

激情すら喪失（そこ）に届かずに Lost my heat.

疼くような残滓ですら 取り零し許さぬと

誓ったんだ 生誕私の日に

全ての始まりに」

エクスカリバーの輝きは目を覆わんばかりとなり、その両刃が左右に割れた。

現れるのは砲身。

光の柱とかビームとかいう力技ではなく、正統派な遠距離も行けちゃう出来る聖剣だとは女史の評価だが、使う自分としては『がんばって出来る様にしたよ！ 褒めて！』と言ってる様な気がしてならず、なんだか愛しきすら溢れてくる。

『ではスタートだ！』

瞬間。

全てのノイズが攻撃態勢に入り、

ー 《蒼穹フェルノートの弓》

エクスカリバーから放たれた幾千ものか細い光条がノイズごと要救護者を焼き払った。

「……」

『作戦失敗。力み過ぎだお前は』

ヘッドホンに響く声にがくりと肩を落とす。

——通算二十六回目の同作戦失敗。

いつも焼き払われたり炭になったりする要救護者のプログラムさんには申し訳なさいでいっぱいだ。

今回の反省点はそもそも、必要最低限以上のエネルギーをぶっぱしてしまったところだろうか。

一旦端に寄り、ノートに書き込んでいく。

そうしてうんうん唸っていると、横合いから冷たさが頬に来た。

「ひゃあうっ!?!」

「円。あまり根を詰め過ぎては良くないわ」

「……風鳴先輩……」

凜とした少女。

トップアイドルにして人類守護の剣がそこにある。

風鳴先輩は呆れた様に肩をすくめると、やああつて思いついた様に口を開いた。

「ふむ……そうね。私と模擬戦……どう？」

「どうと言われましても」

では決まりだな。と少女から剣へと意識を切り替えた風鳴先輩はシユミレートオペレーターに連絡を取って瞬間にフィールドを展開していく。

「そこまで力まず、単なる息抜きだと思おうといい。円。あなたはあなたのやり方があるのだ」

「……私のやり方、ですか」

聖剣ぶっばして終わり。しか思いつかないのは技術局長以外の二課スタッフが大体脳筋だからか。影響受けてるな私。自虐がこぼれる。

「分かりました。胸を借ります」

#

戦闘が始まってすぐ。

翼は円の猛攻を紙一重で防いでいた。

考え無しではない、考え尽くされた幾千もの剣戟乱舞。

聖剣から陽炎の様にエネルギーが熱を持つ。

「頭でつかちだな貴様はッ！」

「考えなければ失うのです！ 永遠に！ 愛した世界も！ 仲間も！ 家族も全てッ！」

打てば響く様に円の思いが伝わってくる。

模擬戦はいい。剣を交え、互いを伝えられる。

それは言語が不要なだけの会話と同じだ。

お互いに歌わなければならぬ今、その会話は心地よさを両者に与えるだろう。

——円の歌は優しいな。

アップテンポで激しい曲調に反し、その歌詞はどうあつても『失いたくない、失わせない』というテーマからは逸脱しない。

ノイズ憎し、相棒の死を今も引き摺る自分としてはくるものがある。

「先輩こそ！ 人を一人背負ってずっと戦い続ける気ですか……!?」

問いが来た。

瞬間、脳が沸騰した。

「貴様に何がわかる!? 奏のことなど微塵も知らぬくせに！」

「——ッ」

飛び上がり、離れた剣は瞬く間に巨大化。

その持ち手を蹴る様にして切っ先を円に叩きつける。

天ノ逆鱗。

「分かりません……ッ！」

対し、円は聖剣を合わせる様にして迎え撃つ。

——面白い。

自分の逆鱗に手垢を付けたのだ。

触れてはならぬ場所があると教えねば。

「ならば知れッ！」

着弾。

円は力より技巧の戦士だ。

互いの剣の先を合わせるなど造作も無いのだろう。

逃げず、受ける覚悟を翼は激情の中であつても評価した。

「つていうかこれ模擬戦じゃないんですか——ッ！」

円の叫びは無視。

ぐりぐりと持ち手を踏んで捻って押し込んでいく。

「ああもう！」

——《逆巻く王風》
キャメロット

不意に巻き起こった嵐が逆鱗ごと翼を吹き上げた。

「――お前は何のために戦う?」

「私は、喪わないために。喪わせないために。誰かが失われてしまえば、誰かの世界はその分死んで寂しくなっていくんです……!」

理解は出来る。

しかし、

「だがそれは、後手に回らざるを得ない我々にとっては自分を殺す願い……」

「分かってはいます」

逆鱗をしまい、構えて対面。

「でも、それでも願わずには居られないんですよ!　――貴女だって知っているでしょ

う!?!」

血を吐く様な声に頭が一瞬で冷めた。

そうだ。

だから、熱くなったのだ。

飛んだ醜態だ。

『わたし』はあの日に死にました。今は『私』として生きています。願いを叶えるために!!」

円は泣きながらも構えた。

#

「ー どうしてこうなった？」

円の冷静な思考は疑問を提起した。

そもそも、これは模擬戦だったはずだ。

それをなぜいつの間にかこんなガチバトルになっているのか。

決まっている。お互いがお互いの痛いところを煽ったからだ。

「ー 失いたくないから、手を伸ばさない。近寄らない」

歌詞は二番。

喪失を恐れる故に手を伸ばせなくなった少女の話だ。

「ー そうすればほら、失わない。けれどどうして？ なぜこんなに寂しいの」

一番で喪わない決意を固め、しかし失った故の二番。

何もない故の寂しさだ。

分かってはいる。

「ー 苦しくて、切なくて、助けなどどこにもなくて」

「はあああああっ!!」

切り込み一閃。

翼が突貫してくる。

それをいなして、

「ーほんとはずつと、気付いていたんだ」

袈裟、横薙ぎ、刺突。

舞い散る火花は舞踏の様に。

「これで終いです」

「なに!?!」

エクスカリバーには十分にエネルギーは収束した。

歌をやめ、上段に振り上げ、下ろす。

《^エク^クス^ス・^カリ^リバ^ーの^バイ

《^エク^クス^ス・^カリ^リバ^ーの^バイ

聖剣の輝きが視界を真っ白に染め上げた。

五話 櫻井了子の突発円の晩御飯

司令官からやらかしの説教を受けた。

めちやくちやくこつてりがつつりバツチリ絞られたし、罰として櫻井女史の研究助手としてしばらく活動するハメになった。

まあ、やる事は基本的に女史の手伝いだし。

ーセクハラが大問題だが。

とはいえ、まあ、それは仕方ない話。自業自得だ。

今回は訓練所が一週間使えなくなったただけだが、一歩間違えたら殺しかねなかったのだから。

ちなみに先輩はビームを避けた。次の機会があれば是非ともぶち当てたい。悔しいし。

とはいえ先輩も無理な動きで肉離れだ。

完全にやらかした。

お互い謝って、とりあえず仲直り。

「ーで、なんでここにいますか？」

櫻井女史

「やあねえ女史な・ん・て。了子って呼んでいいのよ？」

そうして重い足を引きずって家に帰ったら櫻井女史がソファに座ってテレビ見てた。

あれか。天才は頭おかしいとはマジな話なのか。鍵とかどうしたんだと一瞬考えた
が、どうにかこうにか入ったのだろう。考えても無駄か。

思わず通報しかけた私は悪くない。

「考えておきます。で？　なんでここに？」

「円ちゃん寂しいかなあって」

「……そうですか」

なにも言えなくなってしまった。

あとお腹空いたあおゆはんつくつてえと強請る二課の技術局長に毒気を抜かれてそ
のまま台所へ。

「今日は適当にお米を炒めるつもりでしたが。それでもいいですか？」

「ギョーザも付けてねえ」

ほんと自由だこの局長。

ため息を一つ。

ふといたずら心が湧いて、醤油と米だけの炒め物を出してやろうかと思つたがほ
にやあと顔を緩めてテレビを見てる姿にやる気が萎える。

卵と米を炒め、炒飯の素を混ぜて炒飯を。

それと同時に進行で冷凍餃子を出して作っていく。

やがて漂う良い匂いにつられたのか櫻井女史が台所に現れた。

「炒飯つて匂いね」

「炒飯ですからね」

ああんにもなあいとくねる美女を居間に叩き戻して調理に戻る。

といつても、あとは盛り付けだけだが。

器に盛って、皿を被せてひっくり返す。

ドーム状になったのでグリーンピースを乗せて終わり。蓮華を合わせて櫻井女史に出す。

「普段食べてる様な味ではないかもですが」

「あら、一番大事なのは相手を思う心よ」

「クサクないですか言ってます」

「そうかしら？ でも、真実じゃないかしら」

屈託のない笑顔に何も言えなくなる。

それが事実だったらしいと、そう思うからだ。

「早く食べちゃってください」

苦し紛れに台所に引っ込んで、自分の分を持つてきて黙々と食べる。

久しぶりに誰かと食べる夕飯は心に沁みていく感覚がした。

「ほんとは貴方の保有する異端技術を見に来ただけど、なーんかどうでも良くなつて来ちゃったわ。ど？ オネーサンとこのあとお風呂でも」

「色んな自信が砕けそうなのでやめときます」

可愛い、と笑つて櫻井女史はテレビに視線を向ける。

静寂。しかしそれは気まずいものではなく、心地の良いものだ。

「私の異端技術は、魔術と呼ばれています」

「あら、どしたの」

「知りたいのでしょうか？ 別に、味方に隠す意味もありませんし、そもそもこの異端技術は欠陥もいいたくありません」

へえ、とテレビを消し餃子を摘みながら録音機を取り出してスイッチを入れる。

「シンフォギアが歌をエネルギーにするなら、魔術は命。自分の生命力を焼べて現象を起こす奇跡の再現です。時間もかかりませんし」

「命を……」

炒飯を一口。水を飲んでさっぱりさせて、

「ですので使い過ぎれば当然死にます。ですから、私はほぼこの魔術を使う気は無いで

す」

「そうよね。だって訓練でも一回も使ってないし」

なるほど、だから来たのか。納得を得て、頷きを返す。

「そういう意味では、櫻井女史には感謝しているんですよ」

戦う力を、喪失に抗う力をこうして魔術に頼らず得られるのだから。

「照れるわねえ。で、魔術って何が出来るの？」

「時間と生命力が許す限りは何でも」

凄まじいわね、と櫻井女史は呟いてまた炒飯を一口。

「私の魔術師としての切り札は『心象結界』。その特性は鏡に写した様に他人の心象を写し、顕現させるといいますが、使う気は無いです」

「流石にわかるわ。他人の心象を写すということは、自分の意味喪失を起こしかねない。

この事は私と貴方の秘密にしておきましょう」

「ありがとうございます」

「あー可愛い。食べちゃいたいわあ」

ーこの時、私は気付けなかった。

櫻井女史の目が一瞬だけ。猛禽の様な獲物を見る目に変った事を。

この寂しくなった冷たい家世界に唐突に現れ、暖かな日常を再現してくれた優しい女史に

油断していたのかもしれないし、もしかしたらすごく気を緩めていられるほどに心を許してしまっただからかもしれない。

けれども、この時から、櫻井女史に対して心を許すようになったのは間違いがない事実だった。

#

あの後、お風呂乱入などの女同士だから出来る——出来るからと言ってやっていいかは別——のイベントをこなし、就寝の時間。

女史はなぜか私の部屋でテレビを見ているが、勝手に帰るだろう、さあ寝るぞとベッドに入ると、それはもう予期せぬ速度で櫻井女史が乱入してきた。

「若い子と一緒に寝て若さ補充よおー」

「それ私の若さ吸い取ってますよねやめてください!?!」

押し出そうとするがまるで風のように抑え込まれ、女史に背中を向ける形にさせられる。

そして背後から抱きすくめられる。

一瞬遅れて状況を理解し、顔が真っ赤になっていくのを感じる。

「ななななっ、なにをつ?!? ちよ、どこ触って?!?」

「若さの補充よお」

「わわわわわわっ」

「なーんて、ただの触診でしたあ」

「び、びっくりさせないでくださいよ!?!」

足とか際どいところまで触られた。

本当に観察する様な手つきだったからかドキドキはしたが嫌悪はない。

やがて大人しく抱くだけになった女史に何も言えず、なんだか馬鹿馬鹿しくなって身体の緊張を解いていく。

そうしてしばらくの時間静かに過ごしていると、

「聞いたわよー。今日、頑張ったみたいね」

「ああ、いえ、その、恥ずかしいことに中々うまくいなくて」

やりたいことはうまくいかない。そんなものよね。と櫻井女史は女史らしからぬ声色で抱きすくめたままにつぶやく。

その声色は、慈愛……? いや、怒り、もどかしさも感じる?

しかしそろそろ感じる暖かみが眠気を誘い、うまく思考がまとまらない。

「一日よく頑張りました。おやすみなさい。円ちゃん」

頭に本当に軽い衝撃。そして重み。

重みはゆっくりと左右に揺れる。

撫でられている。

とてつもない安心感が心を満たし、眠気が私を覆い尽くした。

六話 ガングニール

「ガングニール……だとオ!？」

「そんな……それは奏の……」

モニターの向こう。

話でしか聞いたことのない聖遺物が起動したという事実が二課のあらゆるスタッフに激震を齎す。

「そんなびつくりする事なんですか？」

「え、ええそうね、びつくりすることよ円ちゃん。そもそも、装者は一つの聖遺物に一人の適合者が普通なの」

近くにいた櫻井女史に疑問をぶつけると、簡単な説明と肯定がくる。

ちらつと我らが二課の剣を見れば痛いほどに拳を握り締め、目を見開いて画面を凝視している。

司令官も同じ。

「でもガングニールのシンフォギアは保管してある……一体誰が……」

「……なんにせよ、私と先輩は現場に急行した方が良さそうですね。……先輩? 風鳴

先輩?」

「ーっ、え、ええ、そうね」

「あ、ちよつと……司令官。あれは……」

まずいのでは。と司令官を見るが、こちらも固まったままだ。

「ええい、想定外が発生したからとそんな硬直しては守るものを取りこぼしますよ!?!」

「、っ?! あつ、す、すまない。翼は現場に……もう行つたのか……」

「ええ。私は」

「いや、円くんはここから行くには少し距離がありすぎる。それに、円くんは翼と違い、固定砲台タイプだからな。周辺への被害が洒落にならない」

「しかし、それでは」

大丈夫、と司令官は悔しげな笑顔で円の頭を撫でた。

そのままモニターを見れば、50ccバイクで駆け抜けて行く剣の姿がある。

「翼はそうやわではないさ」

#

翼は怒りと疑問、脳の半分以上を占めるそれに、思わず突き動かされそうになっていた。

『風鳴先輩。落ち着いてください』

「わかつている……!」

通信機の向こう側で後輩の声がある。

相変わらず何を考えているか分からない色だ。

『風鳴先輩に置いてかれたので今日は単なるナビゲーターです』

私に現場に急行するだけの速度は無いので。

非難するような声だ。

「すまない。だが」

『はいはい。分かりましたよ風鳴先輩。おや、 GANG ニールが動きましたね。これは

……逃げてる……?』

アクセルを握った手が痛くなるほどに握り込まれている。

ー逃げる、だと?

奏なら、奏なら……!

『GANG ニールの性能に任せた回避? 風鳴先輩急いでください。多分、これ一般人で、

しかもさらに一般人を庇ってる可能性があります』

言われずとも。

すでにアクセルはフルスロットル。

燃料タンクを腿で挟み、姿勢を低く、車体に平行に。

「奏なら……ッ！」

#

ーこりや重症ですね。

つい呟いた言葉に司令官が反応する。

「どういふことだ」

「簡単な話ですよ。風鳴先輩、まだ奏さんのこと引きずってます。それもシャレにならないレベルで。多分、すごく依存していたんでしょね」

二課という居場所に依存し始めている自分に言えた話では無いのだが。と脳内で自嘲。

櫻井女史にはお見通しのように、視線を感じる。

最近なにかと構ってくれるなこの人。という感想をひとまず置いて続きを促す司令官に視線を返す。

「色々根拠はありますよ。訓練中とか。でも、一番の根拠は彼女の行動規範ですね。多分『奏ならこうする』が根底ですよ。まあそもそも、女子高生が親友を失って、すぐに立ち直れる訳もないのですが……」

「しかし、二年だぞ」

「たった二年です」

即答にたじろぐ司令官。しかしここで止まらず言葉を重ねる。

「風鳴先輩の戦い方。どうも荒っぽいなと思つてましたが合点が行きました。――彼女、無意識でしようが自殺願望があります」

「なん……だとオ!?!」

「死ねば奏さんに会えますからね」

わたしにも分かります。

そう続ければ司令官のみならず、スタッフ全員に沈黙が落ちる。

「彼女は今、奏さんを汚されたような気持ちなんでしょう」

モニター。

間に合つたらしく、ノイズを轢き飛ばしながら減速なしで突入していく荒ぶる剣の姿がある。

その先にガングニールの反応。

一瞬映る少女は、

「――立花さん……?」

次の瞬間。バイクに仕込んだカメラからの信号は途絶えた。

バイクさんは死んでしまったのか。

「信号、切り替えます」

次の瞬間、ほぼノイズを殲滅している画面が現れ、それを確認した緒川さんが不意に消えた。

「えっ」

「緒川は忍者だからな」

誰も疑問に思っていない。

忍者だから仕方ないみたいだな。えっ。

えっ。

櫻井女史は苦笑いでこちらを見ている。

二課屈指の変人に理解の視線を貰った……!?

#

「ーえっ」

やっぱそうなるよね。

唾然とした立花さんの顔がある。

対してこちら側。

垂れ幕には『ようこそ二課へ！ 立花 響さん！』の文字。

数々の料理は食堂のものか。

完全に歓迎ムードだ。

そしてそれが気に食わないが、強くは言えない風鳴先輩。

多分、風鳴先輩としては未知のガングニール装者に対して歓迎ムードにまでなるとは思っていないかっただろう。彼女の感情を中心に考えれば当然のこと。

「風鳴先輩」

「円か……これは……」

「二課には装者が必要なのです。といえば、分かりますか」

「いや、しかし、それはー」

「彼女は立花響。わたしのクラスメートで、趣味は人助け」

ー貴方ならご存知でしょう。サバイバーズギルトなる言葉を。

まさか、というように目を見開くが、こちらはそれに対するだけの根拠がある。

「二年前のツヴァイウイングの悲劇。その生還者ですよ。彼女」

少なくとも怒りの感情が目から消えたのを確認し、私は風鳴先輩から離れる。

すこしはマシになっただろうか。……いや、しばらく当たりは強いのだろう。しか

し、それは当人同士が解決しなければ前に進めない事だ。

そして櫻井女史に絡みつかれている立花さんに近寄って、

「櫻井女史。それくらいにしてあげてください」

「えっ、鏡崎さん!？」

「はい。クラスメートの鏡崎円ですよ。名前で呼んでくださいね」

緒川さんを手錠を外してもらおう。

ちよつと痛かったのか手首をさすつてやつと解放されたあと気の抜ける声を披露してくれる。

「手荒な真似をしてすいません」

「あつ、いえ! お気にならず!」

緊張したように緒川さんに受け答えをする姿は安全を確かめようとする猫のようにも見えた。

——天羽先輩なら家族。風鳴先輩なら天羽先輩。私なら両親。装者はなにかを失わないとなれない呪いにでもかかっているのだろうか。

であれば、立花さんはなにかを失っているのか。

ふと胸に浮かんだ疑問を笑みで振り払って立花さんに手を差し出す。

「こちら、櫻井女史謹製の荒巻鮭パンです。中々のポリウムですので是非」
「えっ」

七話 やらかしの罰と理不尽

今日も今日とて櫻井女史の研究助手だ。

本日の実験は『フォニックゲインの過重供給によるシンフォギアへの影響調査』である。

つまり、装者を使う。

そして、装者とは私だ。

「なんて顔してるのよ？ 安全性は確認済みだから大丈夫よ」

「いえ、なんとというか、真っ当に実験してる女史を見ると違和感がすごくて」

「あーら。私だつて月に二、三は論文出さないとならないのよー」

それでも学会にはせつつかれるけど。と愚痴をこぼす女史に苦笑いで返し、ふと思いつきを口にする。

「暗にそれ、説得力を持たせる為だけにやる実験では」

「あら正解。ちなみに仮説では、いくつかのギアのロックが外れて限定条件下での運用が可能になる。というのが有力ね」

「ほえ」

流石に国家機密の装者を使って実験しただなんて口が裂けても言えないけどねと笑いながら続ける女史だが、受ける側としてはたまったものではない。

「ま、弦十郎君にも『やりすぎるな』と釘刺されてるし、安心すると良いわ」

「櫻井女史って割とマッドですよね」

「あら。お熱いのが所望？」

「櫻井女史って優しくて素敵だなあ！」

よろしい。と女史は言いながらも慣れた手付きで私に枷を嵌めてくる。

ちなみに私は既にシンフォギアを纏っている。

「……なんでこんなに小慣れてるんですか」

「女は秘密が多い方が綺麗になるのよ」

質問の答えになってない。

あつという間に吊り上げられた我が身で、自由はない。

「そういうえば、知ってるかしら。翼ちゃんと響ちゃんの確執」

「それももう。側で見えますからね」

立花さんは二課に協力ーというか所属ーする意思を示した。

それはまあいい。

体内で聖遺物が融合しているなら、その方が対処しやすいからだ。

しかし、問題は立花さんが風鳴先輩に言った言葉だった。

「奏さんの代わりになれるように頑張ります。」

確かこんな感じの言葉だったはずだ。

彼女としては善意だけで作った言葉だったようだが、受け取る風鳴先輩としてはそうではない。

未だ彼女にとっての相棒は天羽奏であり、彼女だけが相棒になり得るのだと思ってるからだ。

「立花さんの病み加減も凄いいし、風鳴先輩に至っては完全に意固地になってます。毎日愚痴や相談を聞くこっちは板挟みですよ」

「こればかりはどうしようもないわよねえ」

「です。戦場でもケンカーというか風鳴先輩が立花さんを一方的に役立たずだと見做してるからか、あわや大惨事、なんてこともありましてね……」

「ああ……あのバイクに轢かれかけた時ね」

ノイズに放ったバイクが立花さんに乗せてそのままガスタンクに突っ込み、爆発した事がある。

風鳴先輩としては鎧があるから大丈夫だという認識だったようだが、酸欠は別。

そこに思い至らない風鳴先輩を怒鳴って助けさせた事がある。

あの時は流石に風鳴先輩も青ざめてはいたし、最終的にぶつきらぼうに謝ったのでスネを蹴って頭を下げさせた。

流石に拗らせすぎだ。

「あれは肝が冷えました。無傷だったから良かったものの……流石にそろそろ私も限界です。二人まとめてカリバっていいですか。ミニアドでもいいですけど」

「貴女実は二課壊す為に派遣された工作人員じゃないでしょうね」

「私の技は基本的に大火力なんです」

「そんなんだから出撃出来ないのよ。——まあ、英国政府への説明もしてないからそもそもあまり出れないのだけど」

「バレなきや大丈夫では」

「……その派手な火力で？」

そりやそうだ。

「さて、では始めましょう。鼻歌でいいから適当にフォニックゲインを貯めて、増幅してみなさい」

「えーと……L a ー」

エクスカリバーが発光。

振動を開始。

それを確認した女史は逐一計器を見ながらタブレットに数値を打ち込んでいく。しばらく歌っていると、女史が制止の合図をしたので鼻歌ストップ。

エクスカリバーが黄金に輝いていき、その黄金は粒子になって鎧に浸透していく。

「綺麗ね」

「ですね。あつ、あつい！ 櫻井女史！ あつい！ あつい！ あつい！ 櫻井女史！

女史！ あつ、ちよ、了子さんこれ熱いです!!」

「あら初めて名前呼ばれたわね。まあ振動していたし、熱を持つだけの質量があるエネルギーと解釈しておこうかしら。さてAmplitudeはつと……」

「いやそれより枷！ 枷!!」

「必死な声が愛いな」

研究モードにはいると鬼か畜生になることがよく分かった一日だった。

ちなみに、火傷はしなかったものの、後日枷を嵌める意味などどこにもないことを知った私はいつか櫻井女史をエクスカリバーすることを誓った。

#

さて。

この重たい空気をどうしてくれようか。

対面するは立花さんと風鳴先輩。

その間に私。

めげない諦めないへこたれないの体現者であるところの立花響に対し、遂に風鳴先輩がキレてしまった、というのが現状だ。

「立花さん。立花さんは色々勘違いしてます。ああ風鳴先輩は待つてください韃走らないでくださいステイステイ」

「勘違い……」

「はい。まず、立花さんは立花さんでしかありません。最近口癖のように奏先輩の代わりになると言っていました、そもそもだれもそんなことは望んでません」

左手側。

風鳴先輩が今にも剣を抜いて突進しそうなのを手で制し、まずお互いの行き違いや勘違いを修正していく。

「風鳴先輩も少し意固地になりすぎです。少しは先導者としてアドバイスとか、奏の代わりなどいない、望んでない事を伝えるべきでした」

「しかしだな……」

「しかしもなにもありません。会話すら拒んでいては、何も変わりませんよ」

うぐ、と風鳴先輩はたじろぐ。

少しは自覚があったのだろう。

そもそも、風鳴先輩は優しい人だ。どこかで慕ってくれる後輩に罪悪感を感じているのは分かっていた。

それ以上に怒りを抱えているのも。

「あと、立花さんは自己評価を改めてください」

「うっ、いや、でも」

おそらくだが、彼女の自己評価の低さは環境があつたと思う。

最初は普通であつたのだろうが、『悲劇のライブ』後敵しい環境に置かれた彼女はその要因を『ほかに生きるべき人がいたにも関わらずその人たちを押しつけて生きてしまった自分』に求めた。

その結果の人助けであり、基本的に自分に対して全く価値を感じていないのだろう。

しかも、だ。

タチが悪いことにそれを自覚していない。

なので自己評価は他人からの評価に比べて圧倒的に低く、もし他者に褒められたり評価されていることを伝えてもお世辞や社交辞令として受け取って信じることはない。

ーだからこの言葉が効く。

「小日向さんはあなたのこと大好きですよね」

「ふえっ、た、多分……」

「あなたが誰かの代わりになるといふことは、小日向さんがあなたに対して感じている感情を嘲笑う事になることは理解してますか？」

「え？」

よし。釣れた。

「では逆の立場から考えてみましょう。あなたは小日向さんが大好きですよ。で、小日向さんはしかし。そんな言葉には目もくれず、誰かも知らない人の代わりになるのだ、それでみんな幸せなんだと『あなたが好きな小日向未来』を簡単に否定せしめる」

「……それは……」

実は自分にもグツサグサ刺さる言葉で、つつい視線を泳がせる。

「……なんで司令官に櫻井女史に……オペレーター組まで居ますねあれ。なんで。」

「わかりましたか」

「うん……」

「そして風鳴先輩にとって天羽奏という存在は唯一無二。絶対神並の存在感を示してます。もはや帰依してるレベルです。宗教です。なので、そんな存在に代替すると宣言するのはつまり神に並ぶということ。風鳴先輩はいきなりそり立ったバベルの塔を粉砕せしめんとするでしょう」

「待ちささない円」

纏めようとしたら風鳴先輩と模擬戦するハメになった……なんで……!?
櫻井女史に助けを求めると睨まれた。なんで……。どうして……。

八話 円ちゃんおにおこ

「どうやら、先日の話は無駄に終わったようです。流石の円ちゃんもキレそう。キレた。」

「——いい加減にしてください二人とも」

「あつ、いや、これは、その」

「つい先ほど、再び激突があった。」

司令官の乱入が無ければ立花さんは怪我をして居ただろう。

「言い訳は無用です。私の話は無駄に終わったようですし、もはや実力行使以外あり得ません。表に出なさい二人とも。今日は気分が良いのでロングミニアドかエクスカリバーか、どちらか選ばせて差し上げます」

立花さんの顔色が真っ白に変わっていく。

対し、風鳴先輩の顔色は惘然としたままだ。

「……はあ……風鳴先輩」

「——覚悟もない人間が戦さ場に立つなど……」

「なら、さっさと司令官にでも上申して後方支援なりなんなりに回して貰えばいいでは

ないですか。なんなんですか。言ってる言葉はそれらしく聞こえますが、結局私怨ですよね。ただ引きずってるんですか」

「あなたに、何が分かる」とー」

「前も言いましたよね。何も分かりません。分かる気もありません。ーそんな過去の存在にずっと引きずられているなら、ずっと眠って居なさい。いいですか。はつきり言います。迷惑です」

口が回る回る。

思った以上に頭にきていたらしい。

しかし、それは当然だと思う。

別に個人的には過去を引きずろうがなんだろうが構わないと思ってる。

でも、それを盾に戦場に出たり、他人との不理解を埋める努力をしないなら迷惑でしかない。

その結果『誰かが失われる可能性がある』なら尚更だ。

それだけは避けなければならない。

絶句する二人に私はギアを纏って剣を抜く。

「ーだから、二人とも病院に叩き込んでおきます。ご心配なく。あとは私が頑張ればいいだけなので」

荒ぶる感情を表現するように白地に映える金が明滅する。

それによって本気度が伝わったらしく、風鳴先輩は呆然としてこちらに背を向けた。

「……どこに向かうのですか」

「頭を冷やすわ」

「わ、私もッ」

立花さんまでダッシュで消えた。

ギアを解除して、ため息を吐く。

うまくいかない苛立ちを壁を殴ることでぶつける。

「……なんでこんなお互いに対して不理解が罷り通るんですか……！」

「ー円ちゃん」

振り向けば白衣。

入れ替わりに入ってきたらしい櫻井女史だ。

「櫻井女史ですか……」

「バラルの呪詛ー」。かつて世界は一つの言語で統治され、お互いの間に不理解はなかった」

「……バベルの話ですか。神に並ぼうとした人間を不快に思い、神はその思い上がりを正すため、塔をへし折り、言葉までも打ち砕いた」

「そう伝承には記されているわね」

「ー何が、言いたいんですか」

そうね、と櫻井女史はメガネを外す。

その瞳は柔和なそれではなく、鋭く、強い目だ。

「ーその不理解を、その呪詛を打ち砕く術があるとするなら、貴様はどうする。鏡崎

円」

「それはー」

《円くん！ 翼が絶唱を使って重体だ！》

「なっ」

《これより対策会議を行うので会議室に来るようにッ！》

「すいません！ 話はまた！」

返事は聞かず、櫻井女史を置いて会議室に走り出した。

#

「ー容態はどうなんですか!?!」

「安定はしている。が、しばらくは戦えないだろう」

会議室に飛び込むと、そこには二課の主要なメンバーが大体揃っていた。

立花さんの姿もある。

「円ちゃん……」

「立花さん……!! 貴方は大丈夫ですか!? 怪我は!?!」

「私のせいだ……」

「は?」

「どういふことかと短く聞き返せば、追い詰められたような憔悴の顔で立花さんは吐き出すように答える。

「わたしが、覚悟もなく戦場に立ったりしたから、翼さんは……」

聞けば、白いシンフォギアを纏った少女――ネフェシユタンの鎧と呼ばれていた――と交戦。

その高い戦闘能力に対抗するため、風鳴先輩は『覚悟を見せる』と手本を示すかのよう絶唱を口にしたようだ。

「……立花さんのせいではありません。大丈夫ですよ。二課の医療班は優秀です」

「円ちゃん……」

ええ、と湧き上がる焦燥感を抑えて笑みを形作る。

うまく笑えているだろうか。

「では立花さん。風鳴先輩が不在の間は私たちが平和を守りましょう」

大丈夫。大丈夫。あの剣が簡単に折れるはずもない。

今にも駆け出したくなる胸の内を隠し、私はとある場所へと足を向けた。

九話 十三拘束

「――櫻井女史。先送りになっていた女史の研究兼エクスカリバーの強化をしましょう」

乱雑に扉を開き、驚いた顔でこちらを見る櫻井女史の顔すら見ずに提案する。

「エクスカリバーの解析は終わっているのでしょうか？」

「ど、どうしたのよ急に」

「問答をしている暇はありません。風鳴先輩の不在を埋めるためには時間が惜しい」

詰め寄れば、諦めたような表情をした女史はモニターにエクスカリバーの解析画像を表示する。

「以前の実験から得た結果で、エクスカリバーのロックを十三個だけだけ任意に解除出来ることが判明したわ。その鍵となるのは所有者の肉声と、特定の言葉の音声入力ね」

「その言葉とは……？」

「それは、使う時になったら分かるわよ。で、そのロックを解除すると何が起こるか、だけれど」

画面を切り替える。

十三分割されたグラフだ。

一から十三までタイトルがつけられており、数字が大きくなるほど表示されているグラフの数字も大きくなっている。

「主な機能はフォニックゲインの増幅幅の上昇。あとは一時的な貯蔵ね。ロックを解除すればするほど上昇幅は上がるし、貯蔵量も増える事は見れば分かると思うわ」

「はい。これは、凄まじいですね……」

「正直、十三もの拘束を全て解除すると、宇宙くらいでしか放出は出来ないんじゃないかしら。それでも星を砕くには至らないでしょうけど」

さらに次に。

それは、

「反動係数の試算ですか」

「ええ。シンフォギアの限定条件下での決戦仕様ーエクストライブに匹敵する程のフォニックゲインをたった一片の聖遺物がただの機能として制御するなんて無理な事をすれば、当然その所有者には反動が訪れる」

理屈はわかる。

伊達に家でも二課でも最近研究漬けなわけではないのだ。

「三つも解除すれば適合率の低い装者が放つ絶唱級。そこからは加速度的に反動の衝撃

は跳ね上がるでしょうね。今の適合率や戦い方、円ちゃんの地力などを総合すれば、ロックの解除は二つまでが許可出来る範囲よ」

「……」

「そうね、十三のロック全てを解除できるならそれこそエクストライブモードじゃなければとてもじゃないけれど扱いきれない程のフォニックゲインの渦に巻かれて死ぬでしょう。最悪、四つでも円ちゃんは爆散する危険性があるわ」

「爆散!?!」

ええ、と櫻井女史。

画面をさらに変え、

「そもそも円ちゃんのエクスカリバーはただのカケラ。完全状態のエクスカリバーであれば十三どころかその倍ですら片手間に制御出来たでしょうけど、完全とは程遠いケラでは意図的にフォニックゲインの暴走を巻き起こすだけの機構でしかないの」

「つまり、その荒れ狂う暴走した力の渦の制御を間違えれば」

「即、死よ。これを使うなんていうのは自殺志願のやり方でしかないの。それでもこのープロジェクト『ラウンドオーダー』を使うというの?」

気遣うような女史の視線。

しかし、その問いの答えはすでに決まっていた。

「ええ。必要ならば」

「……決意は固いのね。ホント、若いつて羨ましいわ。」

さて、私はまずこの十三のロックに統括機構を付け、《十三拘束》シールサーティと名前を付けたわ」

「十三拘束……」

「ロックを解除するには十三拘束にアクセスするように作ったのよ。で、この十三拘束にアンロックを申請し、承認されれば解除される。その際の音声キーはシールサーティインジヨンスタート《田卓議会承認解除》よ。アクセスすれば、歌と同じくアンロックに必要な項目が胸に浮かんでくるから、その項目を読み上げて《申請提出》リクエストアンシーリングと言えば承認が開始される作りになってるわ」

「偉く気合い入ってますせんか」

「知ってるかしら？ 技術者って割と遊びの部分に本気になるのよ」

、そんなところに本気いらない。

時間かかるし。

………ん？ 時間がかかる？

「まさか櫻井女史。もしかしてですが、戦場でそんな悠長に読み上げる時間が無いことを理解しつつ、『だからこそ』こんな手間かけさせてます？」

「あら正解。だって円ちゃんこうでもしないとあっさり限界超えるでしょう」

ぐうの音も出ない程凶星だった。

この後何回か抗議したが、櫻井女史は聞く耳を持つてくれはしなかったし、なんなら文言を増やすとまで言われたので諦めた。

この分では解除出来るアンロックは一個が限界だろうか。

一先ずの強化を得られただけよしとしよう。

諦めて聖遺物研究の助手の仕事に戻ることにした。

#

十三拘束の本実装には時間がかかるとのことで、本日の私は立花さんの特訓を見に来ました。

場所は風鳴邸。本家の家ではなく、司令官が一人で住む家だ。

「……………うんなんだこれ」

そこには思わず唸ってしまう光景が広がっていた。

サンドバッグ。うん、ステゴロ主体の立花さんだもんね。分かる。

木とかで懸垂とか腹筋鍛える。うん、分かる。

司令官の抽象的でよく分からないアドバイスと、とりあえずやってやれちゃう立花さん。分からない。

映画見て見様見真似で拳法をマスターしちゃう立花さんと司令官。分からない。ど

うして。

あつ、サンドバッグが爆砕した。

「ふ、俺が教えることはもう無いだろう。あとは自分で鍛え、精進するだけだ！」
「はいッ！」

これ立花さんに痴漢しようものなら鉄山靠からの発勁、玉天崩で全身を強く打つて
n ice boat. してしまうのでは無いだろうか。

意図せずして圧倒的な『生身での』戦闘能力を手に入れた立花さんに、これからはな
るべく逆らわないようにしようと心を決めた私だった。

……いや、もちろん立花さんがそんなことするような人だとはカケラも思っていないな
いのだけど。

と、いうかだ。

映画見てご飯食べて寝るだけでここまで強くなった司令官って実は生まれながらの
バグ？

もうむしろ完全聖遺物渡して装者にしたほうが良くない？ 戦鬼絶唱司令官。始ま
りません。

シンフォギアが強化されても生身は年相応の女の子でしかない自分としては、この先
もずっと守ったり守られたりするものであろう小日向さんをちよつと羨ましく感じる。

覚悟とやること、貫き通してでも叶えたい願いを決めた立花さんは、イケメンだ。ただやってることはもうなんか、T A T I B A N A っで感じで現実味が無さ過ぎるが。

十話 デュランダル移送大作戦☆ズドンもあるよ！

どうやらネフシユタンの鎧の装者が狙うのは二課地下にあるデュランダルらしいというのがお偉いさんの見解らしい。

風鳴先輩が負けたのみならず欠いている今、防衛能力に疑問を感じられているという表れでもあるのだろう。

櫻井女史の乗る車に立花さんと共に乗り込む。

最近白衣をもらった（実験に付き合つてるとめちやくちや汚れる為）ので、傍目には博士と助手と助手の友達みたいな組み合わせに見えるだろう。

……周りを取り囲む黒塗りの車が無ければ。

「後方、安全確認しました」

「前方よし、つてね」

「あつ、横大丈夫です！」

車内は護送作戦だというのに緩い雰囲気蔓延し、なんなら音楽まで掛かっている。立花さん。万一の時は私をアテにしないでくださいね」

私の唐突な戦力外自己宣告に立花さんはびっくりしたように振り返る。

「私のギア、火力と範囲が広すぎて周囲の被害が半端ではないんです。かといって範囲を絞れば一体一体しか攻撃出来ないのです、すごく極端なんですよ」

魔術もこうも移動してはうまく使えない。

強引に発動することは出来るが、所詮は不正起動。本来の力の三割も出せれば良い方だろう。

「な、なるほど……頑張りますー!」

「あ、もちろんやるだけはやりますし、逃げるなら囮もこなしますから安心して下さい。戦わない訳ではないので」

「ふふ」

櫻井女史が笑う。

その笑いはなんだ、もしかして『なんか殊勝な事言ってる』的な笑いか。

「ま、この調子なら問題ないわね」

「櫻井女史それフラグ」

次の瞬間、運転席側を走っていた黒塗りの車がノイズに貫かれて爆散。

さらに道路が崩れ助手席側の車が落ち、それを追うようにノイズが貫いて爆砕。

なんとか回避した我々の前方の車も下から吹き上げる水によって宙を舞い、後方を走っていた車を巻き込んで鉄くずとなった。

「……フラグ回収早……」

思わず眩ぐが、櫻井女史の舌噛むから黙ってなさいという声に従って荒々しい女史の運転に耐える。

よ、酔う……。

立花さんをちらりと見れば平気そうな顔で、それはもう手慣れた感が見られる安定した座りと警戒を見せている。

うそん。私の同級生人間卒業し始めてる件。

「薬品工場にいくわよー」

「エクスカリバー役立たずのお知らせえー」

そして薬品工場に入った瞬間。

下から衝撃が走り、車は宙を舞い、天井から逆しまに落下。

全員シートベルトをしていたから良かったが、してしなかったら死んでいたか、大怪我だったことは間違いない。守って良かった道交法。

「ヨオ」

「彼女が噂の謎の装者ですか。ーなんというか、ヤンキーって感じですね」

返事はモノクロのエネルギーボールだった。

「Victory Excurbar tron喪失に伸ばした手ーツッ！」

急いでギアを纏い、まだ固定されてもいないアームドギアで打ち返す。

「ピッチャー返し……!」

ヤンキー少女は危なげなく両肩から伸びる明るい紫の鞭を振るい、攻撃を仕掛けてくる。

「立花さん! 女史を連れて逃げてください!」

「で、でも!」

「大丈夫です! 奥の手もありますし! 櫻井了子の助手を信じてください!」

「う……分かった! 絶対後で会おうね!」

「それフラグなんですけどね……!」

「させるか、よつと!」

少女が振るう銀の杖。

それから緑の光が瞬くと、そこにはノイズが数十程現れる。

なぎ払おうにも位置が悪いし、それ以前に少女の絶妙な動きでの攻撃に釘付けになっている現状、手出しが出来ない。

「くっ……!」

「ーハアッ!!」

気合い一閃。

ギアを纏った立花さんがノイズを瞬く間に滅却。

さらに一呼吸おかずに少女に突っ込んでいく。

「っ、先と立場が逆ですが……！ 櫻井女史！ デュランダルを持って逃げますよ！」

しかし、ここで誤算が発生する。

護衛の片割れであるところのデュランダルそのものがケースを吹っ飛ばして立花さ

んに向かって突っ込んでいく。

「デュランダルが覚醒……!?」

櫻井女史の驚愕の声を背後に、デュランダルは交戦する二人の間に。

ネフシユタンの少女が奪おうと手を伸ばすが、それより早く立花さんが柄を握った。

刹那。

世界がデュランダル覚醒の咆哮に悲鳴をあげるかのように暴風が吹き上げた。

巻き上げる砂塵。

風に遊ばれる瓦礫や炭が視界を奪う。

「……………ッ!!!」

バイザーがあるから目を隠さずに済み、だからこそ即座に反応が出来た。

煙幕の如く立ち込めるそれらを吹き飛ばすように内側からの膨大なエネルギーが発

生。

あつという間に視界がクリアになり、ハツとして櫻井女史を振り向けば、

「……バリア……?」

髪留めもメガネも吹き飛ばされ、しかし余裕の笑みで私の向こう、立花さんの方向を見据える姿がある。

前方に掲げた掌からは六角形の板が繋がったようなエネルギーバリアが展開されており、その鋭い瞳はやや黄金かかったようにも見える。

「じよ、女史……?」

「助手か。無事でなによりだが、今はそう余裕は無いな」

普段より力強く口調。低く、しかし耳当たりのいい女性は果てしなく揺るがない、強い意思を感じさせる。

かつて、一度だけ聞いたことがある。

トラブルですっかり頭から抜けていたが、

「がっ!」

惚けていたら視界外から強烈なのをもらった。

それは白と紫の物体で、柔らかなものを手のひらに感じる。

「つテエ……なんてばわ……あ?」

それは少女で、私は彼女の大きく実った『良いもの』を手のひらに包んでいた。

驚掴みにしたような形のをつい凝視し、反射的に五指を丸め、広げ、丸める。

「――豊満……!!」

「戦さ場で何してやがる変態が!!」

瞬間。

制裁のように空から黄金色の鉄槌が振り下ろされた。

十一話 目覚めると

目覚めると、馴染みのある天井が視界にあった。

どうやら寝ていたらしい。

らしい、というのはあの黄金の一撃の最中に意識を失ったからだ。

揉んだ少女はどうなっただろうか。

というか、あの本性出しました的な櫻井女史は大丈夫だろうか。

「おや、目覚めたようだな」

「……櫻井女史ですか。もしかして、そっちが素ですか？」

ちようどいいタイミングで扉が開き、栗色の髪をアツプにまとめたメガネの——つまりいつも通りの櫻井女史が怜悯なまでに研ぎ澄まされた表情で入ってくる。

「——何も失わない、得られた何かを取り零さない。守る為の力が私のエクスカリバーなの……すいません」

「いや、大丈夫だ。——それに、収穫もあった」

カツン、とベッド脇に立った女史は座ることなく、顔をこちらに向けて笑みを作る。

「私の目的は達成する。しかし、それはそれとしてお前の願いにも私は思うところがあ

る」

その表情は失い、寂しさと辛さを得たことがある共感。

なんだろうかという戸惑いも一つ。

「ーお前はきつと、私の目的に反目するだろう。最初はいい駒にでもしよう、二人いる装者なのだからと臨床実験の為のサンプルとしか思っていないが……」

自嘲気味に顔を歪め、

「どうやら私にはまだ、このような感情が残っていたらしい」

それだけを告げてカードキーを置いた。

「お前の状態だが、一週間は最速でかかる見込みだ。弦十郎からの伝言は『治るまで動くな』だ。それまでは病室の入退室は管理され、お前の退室は許可されない」

櫻井女史は私の目を隠すようにして優しく手を添えた。

「出来れば、私としてはもう少しだけこの助手と戯れていたかったがー」

最優先にしている目標も、目処がついた。

そう続け、繊細な手付きで私の頭を撫でる。

「私の知らぬところで発展した異端技術など目にする事になるとは思わなかったが、悪くない刺激だったよ。助手」

「何を言ってるのですか女史？ 分かりませんか？」

「分からなくていい。どうせ記憶はいじるのだ。『お前はいつもの櫻井了子にお見舞いされ、何事もなく眠った』そうだろう？」

唐突に暗闇から急速に掴まれ、引きずり込まれるような恐ろしい眠気に負け、意識が断絶する。

#

ー入院生活とは暇なものだ。

ベッドからリディアンを眺めながら思う。

どうやらリディアンから響く歌声は装者の回復を早めるらしく、だからリディアンには校内病院とでもいふべき建屋がある。

二課職員と教員が共存する中央棟、病院が併設された校内病院、寮と、表向きの本体である校舎。

あとは聖遺物の織り込まれたノイズを阻むシエルター。

グラウンドもあるが、毎回思うのはなぜあんなカクカクしたコーナーどりをしているのだろうか。しかも途中で三十度くらいの謎のコーナーもある。

目覚めてすぐ、というかベッド脇にいた櫻井女史には大量の課題を出された。

どうせ暇でしょとの事だが、明らかに高校生にやらせるレベルの問題ではない。櫻井了子二世にでもさせる気か。あんな頭良くないぞ私。

「とはいえ、暇つぶしにはちよいどいいのは確かですね……」

あの忙しいであろう女史がわざわざ作ってくれた課題なのだ。罰であれ、助手として動いている以上は役に立たなければならぬ。

ベッドから動けない間は勉強に当てれば、より難しい実験の助手も勤められるーなどと考えて課題に取り掛かる。

問1 左記のアウトヴァツフェン波形はなんの聖遺物か答えよ

波形が割れてる聖遺物何個あると思ってるんだ櫻井女史イ!!!

解析する器具もPCもなく答えるのは無理だ。

ちなみに櫻井女史は全部覚えているらしい。おかしい。

「……よくよく考えたら、この課題機密の塊なのでは？ これ持って帰ったらやばいのでは？」

うつわ厄ネタだと頭を抱えるが、わざわざ手ずから作ってくれた課題だ。返すのは感情が拒む。

「……大きなリング式のファイルで四つとか、明らかに終わりませんよ櫻井女史」

なお、実は私の性格を考慮して課題で足止めというか病院に釘付けにするためだけにこれらを作ったらしいことは全てが終わった後に知ることになるわけだが、この時の私は馬鹿正直に全て熟そうとわざわざ訪れてくれた司令官にPCを強請ったり（遠隔監視

付き)していた。

そしてある日、立花さんが病室に現れた。

「ああ、いらつしやい……で良いのでしょうか。すみません、櫻井女史の課題で散らかっていました」

「ー円ちゃん。ごめんなさい」

深刻な顔をしていた立花さんだが、私は別に気にしてない。

デュランダルを持った立花さんはその内包するエネルギーに耐え切れず暴走。

その思考は『破壊』に集約され、そのように行動する。

というのが課題をやりながら深まった知見による推論だ。

そう説明すると、今度了子さんにお礼言わなきやだね、とへらりと笑って戯けた様に立花さんは笑う。重症だ。

「そんな気に病まないでください。聞いていますよ。私と風鳴先輩の穴を立花さん一人で、それこそ八面六臂の活躍を見せていると」

「うー、えへへ、私にはあれくらいしか出来ないというか……」

暗くなりそうなので話題を変える。

「今、司令官が私のエクスカリバーについて英国側と交渉、説明をしているそうです」
「ほえ？」

「つまり、この結果次第では私も本格的にギアを纏い、戦えるというわけです」

そもそも個人の持ち物なのだが、しかしそれはそれとしてエクスカリバーとは英国屈指の、それこそ象徴と呼べる様な知名度がある聖遺物。

そんなものを日本人が自在に扱うなど、英国側の介入、下手をすれば私の命も危なくなる。

それを避けるための交渉だという話だ。政治つてめんどくさい。

「やった！ 良かったね円ちゃん！」

自分のことのように立花さんは喜んでくれる。

その様に、やはり立花さんは善意の人なのだろうと思うし、尊いとも思う。

こんな人がリディアン話題のレズプルなのだからやっぱイケメンは男女関係ないのか。

いや彼女が欲しいわけではないが。彼氏も同じく。

「ええ、ようやく装者なのに戦えないなんて不名誉な状態から脱却出来そうです。とはいえ、櫻井女史の助手も続けますけど」

最近助手というかモルモットだがまあそれは置いておく。私だって自分の考えた実験をサンプルが自分で被験してくれたら嬉しいし楽だ。実験がしたいのではなくて結果が知りたいのだから。

「円ちゃんは将来了子さんの様になるの?」

「それも良いかもしれませぬね。最初はそうでもなかったですが、こういうのは楽しいですし」

円ちゃん白衣似合ってるからねえ、などと

にへらと笑う表情によく笑う女の子だなあなどと考えてとりあえず感謝を告げる。

白衣は個人的にフェチなので似合っていると云われるのは嬉しい。

「見てくださいよ立花さん。櫻井女史つてこんな課題出してくるんですよ?」

話題の一環として、少し躊躇ったが課題を渡してみる。

開くと三秒で閉じて机の上に。

「円ちゃん頭良いのよく分かった」

「何故カタコトなんですか」

立花さんは勉強が嫌いなようだ。

十二話 襲撃

風鳴先輩が退院した。

退院した瞬間にバトったらしい。

今宵の剣は血に飢えておるわ……。

ごめんなさい嘘です。

でもそのあと復帰ライブやったのはちよつとよく分からない。軽く引く。

まあ、結果としてネフシユタンの装者ー雪音クリスの本名が割れ、さらにかつて紛失した第二号聖遺物イチイバルの装者であることも判明した。

ネフシユタンは完全聖遺物なので聖詠も歌も必要としないからイチイバルを隠すのにはもってこいだった、という訳だろう。

さらにそのバックにフィーネなる女性の影があり、ネフシユタンはフィーネに回収され、雪音クリスを捨てるような発言をして去ったとか。

私は未だ入院ですよ。

デュランダル直撃だったからね。雪音クリスと違って。

それはさておき。

それからノイズとイチイバルの反応が断続的に発生し、それを元に司令官が雪音クリスの拠点を絞ったとかなんとか。

会いに行くけど何持ってけばいいと思うか聞かれたので無難に食料でいいのではないかと答えておいた。

ちなみに私だったらブロックのカロリー食でデイストピア飯っぽくしたお弁当を作ってく。

司令官は苦笑いだった。

#

雨だ。動けないし、頭痛くなるしでストレスがやばい。

櫻井女史が最近来なくなっちゃって寂しいが、本来めちやくちやに忙しい立場の人なのだから仕方ない。

とか、思ってたら、ノイズが襲来。

とりあえずギアを纏ってエクスカリバー。

学校なのでなるべく破壊しないように上空に向けて。

当然地に足がついてるタイプのノイズには全く被害が出ていないし、気すら引けてないので破壊された窓から飛び降りて切って切って切りまくる。

途中で小日向さんと遭遇。危ないところだったがノイズを殲滅し、緒川さんに預けて戦

い続ける。

Song by 『ナイトオブブラウンス』

「――湖光の輝き永遠とわであれ！」

いきなりの強い宣言から始まる激しい曲だ。

こんなのが自分の心象から出たのだと思うと、私は割と激しい性格なのかもしれないと疑念を抱く。

「――白亜の城」

縦に回転斬り。

着地して右、左、正面と切り倒す。

「――平等なる円卓」

背後で悲鳴が聞こえ、弾丸のように走り抜けて女生徒を襲うノイズを殲滅。

その場で跳躍し、エクスカリバーを投げる。

《叛逆の手》
クラレント

その先に密集していたノイズを纏めて炭に返し、エクスカリバーは戻って来ないが、ならば自分から向かえばいい。

背中、腰にあるスラストを一気に吹かせて高加速。

エクスカリバーを取りに行くついでに進路にいたノイズが吹き飛んで行く。

「――我が領土踏むならば、一切の略奪許さぬと」

地面に刺さったエクスカリバーをすれ違いざまに引き抜き、さらに加速して、
「――合理であれと言いついて聞かせ、人を守る！」

巨大なノイズを切り倒す。

「はあ……はあ、つ、ぐ……なんて数ですか……！」

ずっとベッドにいたせいとか、体力が異様に落ちている。

このままではノイズ殲滅より先に気絶する方が早いと自覚するほどだ。

「ですが――」

視界の先、緑の巨人型ノイズが左右に割れる。

「円ちゃん！」

背後。津波のような大量のノイズがひとりの少女、そのたった一回のパンチで炭へと還る。

「急行、ナイスです。……と、そちらが噂のイチイバルの装者さんですか？」

どうやら、仲間には引き入れたようだ。

「よろしくする気はねえよ」

ツンケンした態度ですが、二人がにやけているということはつまり、そういう性格なんだらう。

「ふむ。私は鏡崎円。あなたは？」

知っているが名乗らせる。

なんとなくだが、そうした方がいい気がしたからだ。

面食らったように目を丸くしたイチイバルの装者は私を見て、頭を乱暴に掻き、

「クリスだ。雪音クリス」

渋々といった体で自己紹介。

「とりあえず、ノイズの殲滅を始めますよ」

さすがに装者四人に対し、有象無象となったノイズは敵ではなく、一時間程度でどうにかなった。

十三話 巫女と、何もかもについてけてない私。

ノイズの殲滅を終え、生徒や教師を安全な場所に避難させようかと動き出した途端。大地が揺れ、校舎を壊しながら巨大な塔が屹立する。

カラフルで、しかし不気味なそれから感じる既視感は、

「エレベーターシャフト……!?」

しかし周りの反応は、

「カ・ディングル……!」

私除く装者達は周知の事実かのようにその名を口にするが、え、待つて私ついてけてない。

視線を周囲に彷徨わせると、ちょうどそこに見慣れた白衣が見えた。

「さ、櫻井女史……!」

「フイーネ!!」

雪音さんと私は同じ人物を見て、違う言葉を口にした。

いや、待つて。マジで追い付けない。

櫻井女史は私にとってはほぼお馴染みになったサディストな笑みを浮かべ、

「私は、フィーネ。先史文明より生き、月を穿ちバラルの呪詛から人類を解放し、統治するものだ」

「月を、穿つ……!?!?」

立花さんの驚愕の声に満足気に櫻井女史「ーいえ、フィーネは笑う。

「そうだ。その為のカ・ディングル。その為のー」

フィーネに青白い光がまとわり、形となつて、

「ネフシユタンだ」

感じる敵意、感じる威圧感に足がすくんだ。

ー、いや、違う。

信じたくない現実には、脳が認識を放棄したただけだ。

そんな、と勝手に口から溢れた思いは、彼女の耳には届いたようでちらりと視線が来たのを感じる。

「ふ、高々実験動物風情が、随分と思いがつたものだな」

嘲りの声は遠く、しかしこの身の心臓が跳ねて、風が通り過ぎるような冷たさを感じる。

その言葉は紛れもなく、自分に向けられていた。

「二課に二人いる装者の内、一人は重鎮の娘。もう一人は異端技術を持つと言え、その生

家からは遠ざかっていてかつ親がいらない。実験に使わない道理はないだろう?」

立花さんが怒りの声を上げて抗議。さらには実力行使を開始したが、フィーネは余裕を崩さない。

「ーあいかかわらず足は動かない。

「取り入るのは簡単だった。親が死んだばかりで心の隙間に入りやすかったからな」

手酷い裏切りだ。

だが、それでも頭は空っぽで、何の意味もなく棒立ちだ。

その惨状に出会ったばかりの雪音ですら目を背け、風鳴先輩など必死で召喚されたノイズを片付けている。

「さくらい、じよし……」

ようやく頭が動く。

口を回せ。疑問をぶつけろ。

「なぜ、実験動物に科学を教えたのですか」

「おまえに教えた事など、初歩の初歩でしか無い。痛くもかゆくも無い部分だけだ」

「なぜ、仲間に誘ったりなどしたんですか……?」

初耳だったのか装者三人が一斉にこちらを見る。

「護衛が欲しくてな。ーだが、もはやそれは不要だ」

「そう、です。か。」

頭を思い出が駆けていく。

提出する論文にコーヒーこぼして慌てふためく女史の姿。いつもと違って笑った。

唐突に脱ぎ出して無意味に敗北感を与えられた時のこと。なんだあのスタイルの良さ。

二人して夕飯を食べながら寝落ちた五徹目の夜。ちなみにラーメンだった。熱かった。

課題をこなして褒められたこと。頭に乗った手は優しかった。

戦闘後、すぐに全身チエックされたこと。揉まれた。

手枷、足枷……いやこの思い出はいらない。私の魔術が思い出を燃料にするなら即座に燃やす思い出だ。

ふらり、と覚束ない足取りでフィーネに向かう。

無防備な身にフィーネの鞭が当たり、吹き飛ばす。

「鏡崎イ！ 気をしっかり持て！」

頭から地面に行くまでに風鳴先輩がキャッチしてくれた。

そうだ、そうだよ。風鳴先輩の言葉にハツとする。

「もし、そうだとしても、私がフィーネに、櫻井女史に救われたのは、事実ですよね」

「ああ、そうだ！ おまえにとつてその時間は、真実のものだ！」

風鳴先輩としてはそれを認めるのは嫌なことなのだろう。

だが、認めてくれたというのは、そういうことだ。

「――道を踏み外した恩人を止めるのは私の役目ですよね」

「ほう？」

少し大きめの声で。

自分を奮い立たせて。

「《十三拘束》」
シールサーティ

剣を立てる。

フオニツクゲインが回る。

「私は、あなたを止めますよ。シールサーティデイシジョンスタート《円卓議会承認解除》」

――これは、胸の恩義に報いる戦いである。

――これは、失わない為の戦いである。

十三拘束サーフティにより、二つまでの承認をします。

「見戯で作った機構だ。私に及ぶべくも無い」

「なら、その身で受けてください！」

振り抜く。

塔ごと吹き飛ばそうとしたが、それは盾のように展開された鞭によって防がれる。

「まだ、です」

「ーいや、終わりだ」

カ・ディンギルが光を帯びる。

同時、鳴動するような高音が周囲に溢れ、地響きとなって大地を揺らす。

「させねえ!!」

雪音さんが全砲掃射。

さらに二本のミサイルを発射する。

フィーネを狙うそれを撃ち落とすが、

「狙うは塔か!」

ミサイルを乗り物にするとかいう斜め上すぎる発想によって月とカ・ディンギルの砲身。その延長に躍り出た雪音さんは、笑みで

「I G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l」

絶唱を口にした。

「E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z i z z l」

「させるかアッ!」

フィーネが鞭を伸ばして攻撃をするが、

「Gatrandis babel zigurat edenal」

「間に合わせるっ！」

エクスカリバーを振り抜いて一本を落とす。

もう片方は風鳴先輩が撃ち落としてくれた。

「Emustolronzen fine el zizzl」

そして絶唱は、ここになった。

夜空に、月をバツクに蝶が舞う。

その不思議なほどに美しい光景は次の瞬間、塔から吐き出された破壊の奔流に穢される事となった。

十四話 月を穿つ塔砲

雪音さんとカ・デインギルの砲撃。

拮抗しているようにも見えるが、よく見ればカ・デインギルが優勢だ。

誰よりも雪音さんがそれを理解しているだろう。

手伝いたい。だが、ここからでは間に合わない。

ならばと操作権を持つフィーネに斬りかかるが、防がれた上に鞭での強撃が横腹に直撃。

無様にも転がるだけとなる。

同時、十三拘束の自動安全装置が起動。エクスカリバーに纏われていた淡い光は明滅ののちに消滅する。

「ぐ……」

「月が……」

焦りの声に頭上、月を見る。

そこには変わらず月はあるが、やや欠けている。

視界の端、落ちていく人影を見るが、動くより早く墜落したのを確認。

受け切れず、しかし確実に直撃を避けるために強引に軌道を逸らしたのだと理解するに時間はかからなかった。

「寝ていた私になにがどうなっているとかは分かりませんがー」
剣を杖に立ち上がる。

そのまま支えにし、まだ力の入らない下半身の代わりとする。

「どう考えても！今は貴女の敵になります！」

口に出すのは吹っ切るため。

今だけでいい。後で後悔してもいい。

死んでしまうより、誰かを喪失するよりずっとー

……なぜこんな発想に至ったんだ？

「いえ、それは些事です」

「ち、しつこい……！」

がむしやらに攻撃。

叩きつけるように聖剣を当てていくが、展開されたシールドを割ることは出来ない。

「私がフイーネを止めている間に！立花さん！風鳴先輩！」

「分かった！」

立花さんが風鳴先輩をぶん投げる。

しかし、ここでさらに

「充填開始……！」

カ・ディングルに光が灯る。

それは破滅の輝きだ。

「一発だけだとも思ったのか？ 兵器が一撃如きで終わってたまるものか」

「ど正論……！」

考えなくても分かるほどの正論だ。

可能な限り幾らでも撃てるということであり、兵器として及第というならばさらに量産も可能なのだろう。

恐ろしい話だ。

「しかし、ここにあるのは一機だけです！ 風鳴先輩！」

「させんさ」

「いいえ！ させるのです！」

指を合わせ、

「《ガンド》！」

「なっ!？」

魔術。一瞬動きを止めるだけの魔弾でしかない。

燃費も悪く、撃った後はキツイ貧血状態に陥る程だ。

だが、ここに置いて必要なのはその刹那より短い時間。

聖剣の輝きでフィーネの防御を封じ、指差しの魔弾で動きを封じる。

それらは全て、

「風鳴先輩の一撃を確実に通すため……！」

「やめろオオ!!」

やがて火の鳥の様になった風鳴先輩は光纏う塔砲を半ばからへし折った。

#

戦場は静寂に満ちていた。

折られた先の塔は木っ端微塵であり、風鳴先輩は降りてこない。

諸共か、とバイザーには弱々しくも生体反応を確認して安堵する。

雪音さんの落ちていった森も同様。

フィーネは呆然と塔を眺めており、立花さんもまた、あつという間に二人もの仲間が命を捨てるかのような特攻を見せたことで心に余裕がない様だ。

「ー、かつて、先史文明時代。カストディアンと呼ばれる全能がいた。彼は神として君臨し、カストディアンに仕える巫女を以って世界を運営していた」

「フィーネ……」

「私はな。彼に仕える内に、恋をしてしまった。そうして、思いを伝えようと塔を建て、しかしそれによって私は彼らの怒りを買ひ、文明どころか言語や、彼らとの会話すら奪われてしまった」

唐突に零すのは、動機であり、おそらくはフィーネの行動理念。

「私だつて最初は相互理解をしようと同様なものを提供したさ。異端技術もその一つだ」

しかし、とフィーネは区切り、

「彼らは相互理解をするより、互いを殺し合うことを選んだ。その世代だけならまだいい。だが、人類はいつまでも争い続け、相互理解など深めようともしない」

それは明確な怒りだ。

どこかで共感する自分がいることに気付く。

「しかしフィーネ。それは、」

「ああ。私の罪というならばそうなのだろう。だが、何度言つても聞かないのは人類だ。もはや私も疲れてきていてな。強硬手段に出ざるを得ないというわけだ」

「月を壊し、統一言語を取り戻した後、思いを伝えてどうするのですか」

私の問いに、フィーネは答えを言わなかつた。

ただ明確に、疲れた視線を向けるだけだ。

「聞きますファイネ。貴女の愛したカストディアンは、彼らの息子ともいふべき我々人類を滅ぼし得るような事をやらかした貴女を愛すると本気で思っているのですか？」

「……恋も知らぬ小娘が、私に恋を語るか」

憤怒を湛えたファイネの言葉に、私は左右に首を振る。

「問うているのは私です。恋を説くのは貴女だ」

「……口が上手いな。円。ローフン、ならば説いてやろう」

私はホツと胸を撫で下ろした。

このままいけば、平和に解決できる、と。

日本政府だってファイネ程の技術者を殺したりはしないだろう。

死ななければどうにでも出来る。

「きっと、カストディアンは怒るだろう。当然だ。だが、私の知るカストディアンは平等

だ。きっと許してくださるさ」

それは切ない響きを持つていた。

言葉とは真逆の思いを秘めた言葉だ。

「ローヴォアアアアアアアアア!!!」

「ツ!?!」

「なにっ!?!」

恐ろしい咆哮が聞こえ、フィーネは背中を反らせるようにくの字になって瓦礫にふきとばされる。

拳を振り抜いた姿勢でそこに立つ下手人は、

「立花……さん……？」

真つ黒に染まり、目は赤く燐光を放つ羅刹と化した立花さんの姿だった。

十五話 反転聖劍

「フイーネ!」

「ツチイ……!」

思わず助け起こしに向かうが、鞭で突き飛ばされる。

次の瞬間、フイーネに突き刺さる漆黒の拳。

「完全でない聖遺物が、人体に融合し、その出力に耐え切れなくなったとき、自動で起動する破壊の化身——」

いわば、あれはギアを纏った獣だ。と土煙の幕の中、フイーネは嘲るように吐き捨てる。

「私もまた、融合症例へと自らを昇華したが、やはり完全聖遺物とは違いが著しいな」
煙の晴れた先には真つ二つになったフイーネの姿。

しかし、ネフシユタンの強烈な再生能力によって瞬く間に元に戻る。

「しかし……自分の組み上げた決戦機能の一つにしてやられるのは癪ではあるな!」

——《AIGIS》

再びぶつかり合う。

ネフシユタンの防壁を四つに重ね、分厚い盾とするが、立花さんの拳が当たった瞬間から不気味に軋みをあげる。

悲鳴のようにも聞こえるそれだが、フィーネの表情は余裕のそれだ。

ーどこで乱入するべきか。

攻撃力が過多なのは理解している。

このまま聖剣ビームを放てばフィーネも立花さんも諸共だ。

そうなればフィーネとの交渉は決裂必至だろうし、ただでさえ完全聖遺物とシンフォギアでは出力が違うと言うのに勝てる気がしない。

よって、止めるならば暴走中の立花さん。

しかしフィーネも諦めた訳ではないだろう。

塔は折れたが、なにかを企んでいるのはまず間違いない。

そもそも私はどちらも大事だと認識していて、どちらに味方すべきか迷って動きが取れない。

こうしている間にも、二人は五度目のぶつかり合いに至っており、いかに決戦機能といえ、そもそもその出力や戦闘経験が違い過ぎるからかあしらわれているようにも見える。

とんでもない出力でエネルギーが収束し、立花さんに向かって照準が合わせられているのを理解する。

「ーなら、」

閃き。

それが一番早いと確信をする。

できるかどうかでは無い。

やらなければならぬ。

このままでは立花さんも弔り殺しだ。

しかし、救い出すには様々な不足が壁となる。

「ー卑王鉄槌。極光は反転するー」

謳うは減衰魔術。歌と同じく胸に浮かんだ呪文ではあるが、効果はあった。

聖剣の纏うフォニックゲインに異物である魔術が混じり、その荘厳なる輝きは瞬く間に穢され漆黒へ堕ちる。

それが意味するのはエネルギーがマイナスまで落ち込んだということ。

マイナスまで落ち込んだ出力で、しかし減衰し続け反転魔術にまで昇華した術式により数値上は負の値を示しているに関わらず、現実には圧倒的な程のフォニックゲインを撒き散らす矛盾が成立する。

「光を呑め」

フィーネが気付くがもう遅い。

溜め込んだエネルギーを盾状に展開して構える。

対し、こちらといえは過重なエネルギーを溜め込んだ聖剣が軋みをあげ、ドレスに付属した装甲は渦巻くエネルギーに耐え切れず自壊していく。

「反転聖剣・極光砲撃——ッ！」
エクスカリバーモルガン

シンフォギアを、フォニックゲインすら術式の一部と組み上げたぶつつけ本番の大砲撃は極大の斬撃砲となって二人ごとへし折れた塔を縦半分に砕き裂いた。

#

黒き極光の奔流が収まる。

市街への被害など一切考えていないそれは十三拘束無しですら壮絶な威力を誇り、機能停止にまで追い込まれたカ・デインギルを再起不能修理不能にまで落とす。

それどころか盾を粉碎され、フィーネ自身も下半身を失い、しかし再生能力に物を言わせて復活させたが、融合症例第一号はどうか。

「……ウ、う……」

生きている。

どうやら直撃を受けたのは自分だけらしい、とフィーネは思う。

「容赦が無いな……!」

「フン、手足を腕いだ程度では貴様は死ななだらう」

朦々と立ち込める土煙を切り裂いて、怜悯な声が響いてくる。

その声は鏡崎円そのものであり、しかしどこか違うそれだ。

「それがおまえの本性か?」

「いや、違う。さっきの魔術はエネルギーを反転させ、負に落としていくものでな」

自嘲気味に笑う姿が露わになる。

ギアの装甲は無く、無事——といつても碎ける寸前だが——なのはバイザーくらいだろう。

白と金の壮麗なギアは反転魔術の影響か黒と赤に染まり、アームドギアである聖剣もまた、その身を闇に染め上げていた。

適合率は落ちている。

が、そこもまた反転魔術。

落ちれば墮ちる程出力を増すものへと姿を変えていた。

「ほう、奇妙な姿だな」

「ツハ。下半身丸ごと失って生やした女に言われたくは無いな」

売り言葉に買い言葉。

「立花はー、無事か。起きろ」

堕ちた聖剣の輝きを容赦なく振り抜く。

漆黒の風圧が転がって呆然としていた融合症例を現実に取り戻す。

無論当たらないようにではあるが、その姿は普段が清廉な王であるなら、それに対する暴君だとしても言えるだろう。

「随分と性格も変わったな」

「貴様と若干被っているのは業腹ではあるな」

「い、痛い……でも……」

背後、立花響が起き上がるのを感じるが、この暴君から目を離すことは出来ない。

「そこまで警戒することはない。実は、私も既に限界でな。さっきの『気つけ』も当てるつもりが目が霞んで狙いが逸れたくらいだ」

言葉を証明するようにぐらりとバランスを崩す円。

聖剣を杖にするが、半ばから折れて倒れ込んだ。

「馬鹿な子」

「自覚はしている」

動かない。いや、動けないのだろう。

倒れたままの姿に滑稽さを感じ、笑いが込み上げる。

両肩から下がる鞭を砲身にエネルギーを溜め込む。

これをぶつけければ流石に塵となるだろう。

「まど……か、ちゃん……。クリスちゃんも、翼さんも、みんな……」

茫洋と立ち尽くす融合症例を八つ当たりするように煽る。

これくらいでは死なないだろうが。

今溜めているエネルギーボールを当てて仕舞えば全てが終わる。

そんな時だ。

歌が、聞こえた。

十六話 X D

立花響は歌を聴いていた。

それは、さまざまな声のハーモニー。合唱だ。

よくよく聴いていけば、親友や気の置けない友人たちはもちろん。教師やクラスメートの声も聞こえる。

「ツチ、耳障りな……」

フィーネは切つて捨てるそれだが、ああ、それはなにより雄弁な、無事の証明。

「どこから聞こえてくる……？ この不快な……歌……ー歌だ?!」

そのメッセージなんか考えなくても分かる。

感じる。今まで繋いでいった掌から、身体の全部から、熱くなるような不思議な力を。

「……聞こえる。みんなの歌が。みんなが頑張ってるんだ。だから」
拳を握つて歯をくいしばる。

下肢に力を込めて這つてでも立ち上がる。

「まだ歌えるツ！ 頑張れるツ！ 戦えるツ！」

「まだ立ち上がる……?! 円といい貴様といい、なんだそれは?! 何を支えに立ち上が

る!? 思いも心も確かに折砕いたはず……何をもって力と変える!? 鳴り渡る不快な歌の仕業か!? それは私の作ったものか!? おまえの纏うそれはなんだ!? なんなのだ!?”

円ちゃんを見る。

顔だけ向けてニヤリと笑っているのが見えた。

口だけの動きだが、不思議と声が聞こえる。

——答えてあげてください。

だから、大きく息を吸って、

「——シンフォ、ギアああアアアアアアアアッ!!!」

瞬間。

爆発的なエネルギーが四つ。

飛び上がって天を衝き、雲を割った。

#

痛みが引いていく。

軋みをあげていた装甲は立ち直り、より頑丈に強化される。

無茶で碎けた聖剣は白と金、そして黒と赤のふた振りになり、両腰に生成された鞘に

納まり、同時に胸に歌が。

それはきつと愛の歌。

抱きしめ、手を繋ぐことを切望する願いの歌。

誰かと繋がることをどこか切望する我々二課の装者に相応しい歌だろう。

まるで当たり前のように馬のようなアームドギアに乗っているし、天馬でもなくせに空を駆ける。

「エクストライブモード……！ どこまでも厄介な……！」

だが。とファイネは銀の杖を取り出す。

ノイズを呼び出し、ノイズを操る聖遺物ソロモンの杖。

それをとんでもないフォニックゲインを潤沢に使い、ノイズを大量に召喚していく。

「ヘッ、今更ノイズなんざアッ！」

しかし空を自在にかける装者達にとっては苦にすらならない。

文字通り今更ノイズ。だ。

が、ただそれだけで終わるはずもない。

不意にノイズがファイネに向かって飛んでいく。

それは一体ではなく、全て。

「一体なにを!？」

そこに現れたのはノイズの集合体から成った赤き龍。

胴体部近くに見えるフィーネはソロモンの杖とデュランダルを持ち、姿もネフシユタンから赤い衣に変わっている。

「我が大願を阻止したのだ。覚悟は出来ておらう？」

苛立ちのままに、怒りのままに放たれた極大のレーザーが街へと。

防ごうと動くが、その瞬間には既に着弾している。

まず来たのは光。

視界が潰れるような圧倒的な輝きが目に入る。

間髪を置かず来るのは音。

今まで聞いたことが無いような凄まじい轟音が耳を潰す。

最後、音とほぼ同時に来たのは爆風だ。

暴力的なまでの横殴りの風が吹き荒び、一瞬で大気を使い切った果てに落ちた大気圧を戻そうとした星の理が爆心地側に大気を送り込み、その勢いが同程度の暴風となって吹き込んでいく。

幸いにして装者は巻き込まれなかったし、直撃もしなかったが、もしどちらかであったならとゾツとする。

「容赦も躊躇も無しかよ……！」

雪音さんの声に誰もが同意する。

「もうあれば撃たせてはなりません。飽和攻撃で圧殺していくしか無いと思いますが……」

「んなら任せろッ！」

——

雪音さんの全力一斉射。

ミサイルに弾丸。果てにはレーザーまで。

それら全てが赤き怒りの龍に襲いかかる。

さすがに地面に固定された上での巨大な集合体。

避けられるわけもない。

「どーだよー！」

「こーうだが?」

爆煙の中、見下したような声が響く。

そして煙の向こう側赤い触手が横薙ぎに振るわれ、それはほぼ一瞬で伸長。

あつという間に届く鞭撃となって振るわれた。

「ーッ！」

聖剣を即座に抜いて十字に重ねて防御とする。

気合いを入れ、しかしあまりの重さに声にならず潰れた吐息となって肺から出て行

く。

「ーアアアッ!!」

聖剣の刃に追加されたスラスターを十字の下側だけ吹かせて上方向への慣性を作り、強引に弾く。

胴体のフィーネが驚いたように目を開いている。

「風鳴先輩!」

ー蒼ノ一閃

返事は声ではなく、行動。

即座に振り抜かれた蒼き神剣はフォニックゲインを斬撃と固め、物質化して飛び道具とする。

それは赤き龍の頭部に当たるがー

「今更そのような攻撃が効くものか。完全聖遺物ネフシユタンを再生リソースとするこの龍に対抗するなら、完全聖遺物で無くてはなあ?」

あまりのうっかりさんに四人いる装者の内三人が顔を見合わせた。

にやりと笑った雪音さんが口火を切る。

「聞いたか?」

「ええ。雪音さん。解説は敗北フラグだと彼女に教えてあげましょう」

「ふふ、そうだな」

「ええ？ つまりどういう……」

未だ分かっていない立花さんはとてもかわいらしいんだこの寒気。

「つまり、おまえが切り札って訳だ！」

まず雪音さんが呐喊していく。

そして風鳴先輩がアームドギアを巨大化していき、

——蒼ノ一閃

斬撃を。

世紀のうっかりさんフィーネは余裕の笑みで自分への直撃を防ぐために胴体の隔壁を降ろすが——

直撃。穴が空いた隔壁を抜けて雪音さんが侵入していく。

「持ってけ全部だ！」

隔壁内で様々な火薬が爆発していく。

内部は衝撃でひどいことになっているだろう。

そして、その衝撃によってフィーネの手からデュランダル完全聖遺物が抜けて宙を舞う。

「受け取れえ！」

雪音さんが何発か撃ってデュランダルを弾いていくが、弾丸足りない！

落ち行くそれを寸でのところで聖劍ホームラン。
追い継る触手を馬を捨てて自爆させ、片付ける。

馬捨てても飛べるといふのはわかったが、ちよつと思いつきが過ぎた。

「立花ア！」

「立花さん！」

残心していた風鳴先輩が叫ぶのと私が叫ぶのは同時。

覚悟を決めた顔で立花さんがデュランダルをキャッチ。

瞬間。

立花さんが真っ黒に染まった。

暴走だ。

第一期最終話A. パート S y n c h r o G a z e r

ー暴走。

立花さんを除く三人が慌てて立花さんを抑え込みにかかる。

幸いにしてXDモードのおかげか、暴走に抗えているらしく、黒が時たま光に吹き飛ばされるように顔や腕などの一部だけ剥げる。

「ツ……ヴツ……ア……グウ……！」

まずい、と加速した眼下。

ーシエルターが吹き飛んだ。

ここで敵かと身構えるが、そこにはー

「正念場だアツ！ 踏ん張りどころだろうが！」

「……えっ」

拳を構えた司令官が叫ぶ。

いや、え、待って。どう見ても怪我しててそのパンチ撃てるの嘘でしょ……！

思わず愕然とするが、状況は待ってくれない。

次々に飛び出して来た緒川さん、藤堯さん、友里さんが立花さんに声をかけていく。

それはきちんと届いてはいるようで、立花さんは顔を歪めながらもそちらに向けた。

「屈するな立花！」

「おまえを信じて、おまえに全部賭けてんだ！ おまえが自分を信じなくてどうすんだ

よ!？」

「ーウググググ……グ……ガガ……！」

立花さんの左右。

風鳴先輩と雪音さんが立花さんを支えるようにして抱きしめる。

相変わらず立花さんは抗いに全力を賭けているがー

「攻め時を見誤る私ではないッ！」

「ッ!？」

計六本の触手が伸びてきた。

朱色となったそれは真っ直ぐに立花さんを刺し殺しにかかるが、

「させません！」

ふた振りの聖剣を振り抜いてビームを防壁として正面から展開。

攻防同時の一手とする。

「フイーネは私が抑えます！ だから負けないでッ！」

「ーッチー！」

そして下から来るのは立花さんの友達からの応援。

「貴方のお節介を！」

「あんたの人助けを！」

「――今日は！ 私たちが！」

「姦しいッ！ 黙らせてやるッ！」

フイーネの苛立ちの声。

同時に六本の触手にエネルギーがチャージされていく。

「デュランダル無しでもまだ撃てる?!」

「腐っても完全聖遺物二つだッ！」

「――ああ、いや、

「ならば！ シールサーティーンデザインジョンスタート 円卓議会承認解除」

「――これは友を守るための行いである。

「――これは抗うための戦いである。

「――これは命を守る戦いである。

「――これは世界を救う戦いである。

「――四つの申請を確認。解除。

瞬間。溢れ出る無限とも言えるほどの、凄絶なフォニックゲイン。

それを間髪入れず、撃たれた六本の砲撃に向けて振り下ろす。

「――《限定解放・円卓の剣》
k n i g h t o f r o u n d

「――これでも相殺が限界ですか!？」

背後、風切り音と立花さんの呻くような叫びがして、抗いに失敗したことを悟る。

「――が。」

「響イーツー!」

小日向さんの声。

振り下ろされる寸前のデュランダルはそのまま停止し、さらに下からはみんなからの声援が届いていく。

「――塗り潰されて、なるものかあああつ!」

立花さんはずいに暴走を打ち破った。

同時、激しく背後で渦巻くフォニックゲインを感じ、そして浴びる。

即座に急降下。

「その力は……何を束ねた!？」

「響き合うみんなの歌がくれた、シンフォギアでえーーツ!!」

「――S y n c h r o g a z e r !!」

私の先の砲撃など鼻で笑うほどのフォニックゲインを纏った一撃を振り下ろした。

それは容易く龍を断ち、その重厚だった赤き鎧は瞬く間に溶け出していく。「完全聖遺物同士の対消滅……」

呆然としたファイネの声が響く。

そして消え失せたデュランダルを振り下ろした形で残心する三人。

ちよつとあそこに混ざりたかった、などと寂しさを覚えるが、それはいい。

「……どうしたネフシユタン！ 再生だ！ この身碎けて、なるものかアアッ！」
次の瞬間。

ファイネを中心として大爆発が一带を襲った。

第一期最終回Bパート

全てが終わった。

それを象徴するが如く世界は夕暮れに沈み、私たちは達成感と脱力感に包まれていた。

「なぜ、助けた」

立花さんが肩を貸して歩かせるフィーネの第一声だ。

「私たちは排除するために戦ったのではないのですよ。櫻井ーいえ、フィーネ女史」
「なに……？」

女史の顔に映るのは猜疑より、純度の高い疑問。

なぜ、どうして？ とセリフ以上に顔で疑問をぶつけてくる。

「つたくよお、なんなん私のガラじゃねえーだろ……わーつたよ言うよ。私らは、少なくともその騎士バカと私はアンタを知りたいんだ。知って、んでまあ、なんだ。出来たら笑っていったら良いと思う」

「……騎士バカとはなんですか騎士バカとは。たしかにギアは最高の騎士が持った剣ですけど。ん、まあ、それはそれとして。かつての人類はマジでダメだったかも知れませ

ん。しかしですよ女史」

「なんだ」

「今日あなたが負けたのは、かつてあなたが信じ、しかし奪われ、そして取り戻そうとした恋愛の一つなんです。人には実は、まだまだ可能性が残ってます。どうですか？」

「身体に教えこまれたよ。フン」

そっぽを向く女史に苦笑を送り、私たちは月を見る。

背後では立花さんとフィーネがまた話をしているようで、これでまた、日常が返ってくるのかとほっこりしていた瞬間。

「甘いわッ！」

背後。風を切って月に向かう紫の槍が向かった。

剣で振り払おうとするが、間に合わない。

なんてスピードだ。

「ンヌアアアアア！」

そして月の背負い投げ。一本。

「フィーネ女史が司令以上の怪力erであるのは分かりました。はあ。全く」

ひとりごちて振り向く。

「胸の歌を、信じなさい」

あの一瞬に何があったかは知らない。

が、やらかした直後の人間としては意味が分からないほどの笑みを浮かべている。

「全く。あなたも、先を見なさい。後ろばかり見ているは、守るものも守れないわよ」

女史は濃紫の瞳を揺らして私に言葉を送り——崩れていく。

自壊すら厭わない、まさに最期の一撃というやつだったのだろう。

だが、彼女には唯一無二の特性がある。

リインカーネーション。即ち、いつか、どこかの場所で再びフィーネは復活するとういう、フィーネの血族の数だけ残機がある条件付き転生システム。

ならば、

「……絶対。次のあなたを見つけますよ。女史。その時は酷いんですから」

「じゃ、課題——」

最後まで言い終わらずに女史は消えていく。

多分。見つける事を課題だと言ったのだろう。

あつという間に月を砕いて帰還。

月を砕く前に六角板が集まったバリアが見えたのは気のせいだろうか。

あと。もう十三拘束解除してロンゴミニアドらない。地球でやったらあかん。心に

決めた。